

42120

教科書文庫

4
810
42-1941
200030 2301

518

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

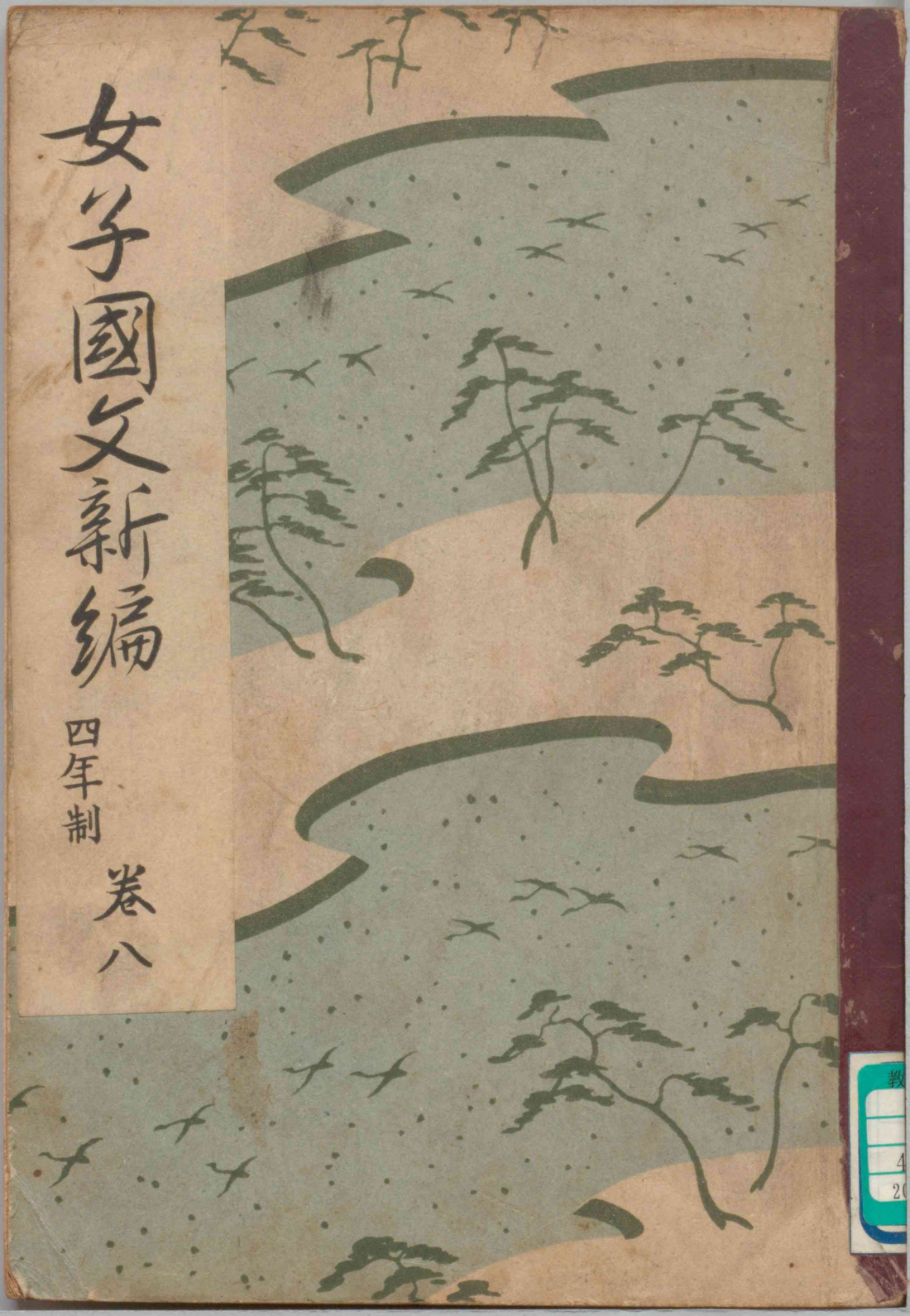
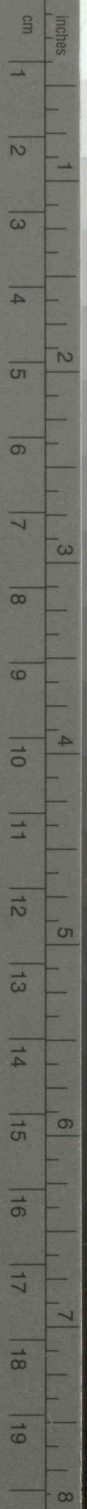


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



女子國文新編

四年制

卷八



資 料 室

教科書文庫
4
810
42-1941
2000302301

46

810

BB16

文部省檢定濟

高等女子學校國語教科書 昭和十六年九月四日

女子國文新編

四年制

東京高等師範學校教授

垣內松三編

広島大学図書

2000302301



- 一 國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。
- 二 教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。
- 三 縦に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。
- 四 右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。



目次 (卷八)

一 おどろのした……………(増鏡)……………四

二 能樂禮讚……………戸川秋骨……………一四

三 羽衣……………(觀世謠本)……………二二

四 入間川……………(狂言記)……………二六

五 豊臣太閤……………三上參次……………三七

六 生花の美……………岡倉覺三……………四〇

七 茶境……………奥田正造……………五二

八 風雅の賦……………松尾芭蕉……………五九

九 俳人蕪村……………正岡子規……………六六

一〇 雅文六篇……………中島廣足 香川景樹 清水濱臣 伴蒿踪 橋野覽……………七四

一一 物語論……………本居宣長……………七九

一二 一茶文抄……………小林一茶……………八五

一三 汽車に乗りて……………上田敏……………九二

一四 春を待ちつゝ……………島崎藤村……………一〇〇

一五 生命の冠……………山本有三……………一〇三

一六 人の人たる所以……………穂積重遠……………一〇七

一七 世界の四聖……………高山樗牛……………一四三

一八 國民文化…………………………一五九

附録 日本文學年表(近世現代)

### 一 おどろのした

御門はじまり給ひてより八十二代に當りて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。治承四年七月十五日生まれさせ給ふ。文治元年三月二十五日御年六つにて位に即かせ給ひけり。御門いとおよすげてかしくおはしませば、法皇もいみじううつくしとおぼさる。文治二年十二月一日御書始させ給ふ。御年七つなり。建久元年正月三日御年十一にて御元服し給ふ。おなじき三年三月十三日に法皇崩れさせ給ひし後は、御門ひとへに世を知ろしめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民安くして、あまねき御うつくしびの浪、秋津島の外まで流れ、繁き御惠、筑波山の陰よりも深し。

#### 高倉

- (一) 安 徳御母建禮門院
- (二) 守貞親王 御母七條院
- (三) 惟明親王
- (四) 後鳥羽(御母七條院)
- 七條院 藤原胤子。
- 修理大夫信隆の女。高倉天皇の妃。
- 治承四年 紀元一八四〇年。
- 文治元年 紀元一八四五年。
- 法皇 後白河法皇。
- 畫始 童子の始めて書物を讀む儀式。
- 建久元年 紀元一八五〇年。

よろづの道々に明らけくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける。御歌かず知らず人の口にある中にも、



影成品天羽鳥後

奥山のおどろのしたもふ  
みわけて道ある世ぞと人に知らせむ

と侍るこそまつりごと大事と思  
されけるほど著く聞えて、いと  
みじく、やむごとなくは侍れ。

建久九年正月十一日、第一の御子四つになり給ふに、御位譲り申させ給ひており給ふ。御年十九。位におはします事十四年なりき。今日明日、二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よるづとこ

おどろ 雑草・荊棘  
などのむらがり生  
せる處。

やむごとなし 責し。

第一の御子 土御門  
天皇。

実たしかるべき未  
だ御讓位し給ふ御

ろせき御ありさまよりは、なかく、やすらかに、御幸など御心のまゝならむとにや。世を知ろしめす事は、今もかはらねばいとめでたし。

鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住ませ給へど、猶また水無瀬といふ處に、えもいはずおもしろき院づくりして、しばく通ひおはしましたつ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひかして、遊をのみぞし給ふ。處がらも、はるく、と川に臨める眺望いと面白くなむ。元久の頃、詩に歌を合はせられしも、とりわきてこそは。

見わたせば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋と  
なに思ひけむ

萱葺の廊渡殿などは、はるく、と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゞずまひ、苔深き深山木

壽にあらざるをいふ。

白河殿 今の京都市上京區岡崎町の邊りにありし離宮。  
水無瀬 大阪府三島郡島本町大字廣瀬。

元久の頃 土御門天皇の御宇。(八益一六六)

廊・渡殿 本殿より釣殿・泉殿・對の屋等に通ずる廊をいふ。

霞の羽 仙人の栖處。轉じて、上皇の御所に申す。  
定家 藤原俊成の子。新古今・新勅撰集の撰者。仁治二年(一一六一)歿、年八十。

に枝さしかはしたる庭の小松も、げにく、千世をこめたる霞の洞なり。前裁つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家の中納言いまだ下藤なりける時に奉られける。

あり經けむ本の千年にふりもせでわが君ちぎる  
みねのわか松

君が世にせきいる、庭をゆく水の岩こす數は千  
世も見えけり

今の攝政は院の御時の關白基通のおとゞ、その後は後京極殿と聞え給ひし、いと久しくおはしき。このおとゞはいみじき歌の聖にて、院の上おなじ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける。文治の頃千載集ありしかど、院いまだきびはにおはしまししかばにや、御製も見えざるを、當帝位の御ほどに、

下關 官位の低きもの。

基通 藤原氏。近衛基實の子。天福元年(一一九一)歿、年七十四。

後京極殿 藤原良經。九條兼實の子。博く樂藝に通じ、最も和歌に長ず。攝政太政大臣に至る。建永元年(一一六一)歿、年三十八。

文治の頃 文治三年(一一九三)藤原俊成、千載和歌集を撰す。きびは 幼少なること。

また集めさせ給ふ。土御門の内のおとゞの二郎君、右衛門督  
通具といふ人を始にて、有家の三位、定家の中将、家隆、雅經など  
に宣はせて、昔より今までの歌をひろく集めらる。おのゝ  
奉れる歌を、院の御前にて自らみがきと、のへさせ給ふさま  
いと珍しく面白し。この時も、先に聞えつる攝政殿とりもち  
て行はせ給ふ。

この撰集より先に、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、勝れ  
たる限りを撰ばせ給ひて、その道の聖達判じけるに、やがて院  
も加はらせ給ひながら、猶このなみには立ちおよび難しと卑  
下させ給ひて、判のことばを記されず、御歌にて勝り劣れる  
志ばかりをあらはし給へり。なか／＼いと艶に侍りけり。  
上のその道をえ給へれば、下も自ら時を知るならひにや、男も  
女も、この御代にあたりてよき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮

土御門の内のおとゞ  
源通親。  
遍具 正二位大納言  
に至る。嘉祿三年  
(一〇八七)歿、年五十  
七。  
有家 藤原重家の第  
三子。従三位に叙  
せらる。建保四年  
(一一三二)歿、年六十  
二。  
藤原家隆 一代の詠  
歌六萬首に上る。  
宮内卿に任ぜらる。  
嘉祿三年(一〇七七)歿、  
年八十。  
雅經 藤原賴經の子。  
參議に至る、家を  
飛鳥井と稱す。承  
久三年(一一八二)歿、  
年五十二。  
この撰集 新古今和  
歌集。  
千五百番歌合 仙洞  
百番歌合ともい  
ふ。二十卷あり。  
判のことは 批評の  
言葉。

内卿の君といひしは、村上の御門の御後に俊房の左のおとゞ  
と聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つかさ淺く  
てうちつゞき四位ばかりにて失せにし人の子なり。まだい  
と若きよはひにて、そこひもなく深き心ばへをのみよみしこ  
そ、いと有難く侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院の上宣  
ふやう、こたみは皆世にゆりたる古き道のものどもなり。宮  
内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめれば  
なむ、かまへてまるが面おこすばかりよき歌仕うまつれ。」と  
仰せらるゝに、面うち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、限りな  
きすきのほどもあはれにぞ見えける。さてその百首の歌、い  
づれもとり／＼なる中に、

うすくこき野邊のみどりの若草に跡まで見ゆる  
雪のむらぎえ

宮内卿 後鳥羽天皇  
の宮女。巨勢師光  
の女。畫文をよく  
す。  
俊房 村上天皇の皇  
子、具平親王の孫。  
失せにし人 右京大  
夫源師光。



草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えける  
ほどをおし量りたる心ばへなど、まだしからむ人はいと思ひ  
より難くや。この人年積るまであらましかば、げにいかばか  
り目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せにし、いと  
いとほしく、あたらしくなむ。

かくて、この度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二  
年三月二十六日、竟宴といふこと、春日殿にて行はせ給ふ。い  
みじき世のひゞきなり。かの延喜の昔おぼしよそへられて、  
院の御製、

石の上かみふるきを今にならべこし昔のあとをまた  
たづねつゝ、

攝政殿、

敷島ややまとことばの海にして拾ひし玉はみが

かれにけり

次々ずん流るめりしかど、さのみはうるさくてなむ。

かくて、院の上は、ともすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひて、  
琴笛の音につけ、花紅葉のをりくゝにふれて、よろづの遊びわ  
ざをのみ盡くしつゝ、御心ゆくさまにて過ごさせ給ふ。誠に  
よろづ世もつきすまじき御世の榮、次々今よりいと頼もしげ  
にぞ見えさせ給ふ。御碁うたせ給ふついでに、若き殿上人ど  
も召して、これかれ心のひきくゝに挑み争はせさせ給へば、あ  
るは小弓、雙六などいふ事まで、思ひくゝに勝負をさうどきあ  
へるも、いとをかしう御覽じて、さまぐゝの興ある賭物どもと  
うでさせ給ふとて、なにがしの中將を御使にて、修明門院の御  
方へ、何にても、をのこどもに賜はすべき賭物。」と申させ給ひ  
たるに、とりあへず、小さき唐櫃の金物したるが、いと重やかな

目に見えぬ云々「力  
をも入れずして、  
天地を動かし、目  
に見えぬ鬼神をも  
あはれと思はせ、  
猛き武士の心をも  
慰むるは歌なり」。

(古今集序)

あたらし 惜し。

竟宴 勅撰集や書物

の進講終りたる時

に催す祝宴。

春日殿 一條通の北

にあり。

延喜の昔 醍醐天皇

の延喜五年。古今

集の撰ばれし時を

いふ。

石の上「ふるき」に

かゝる枕詞。

攝政 藤原良經。

ずん流る 順流るに  
して、次々に言ひ  
出す意。

殿上人 清涼殿の殿  
上の人に伺候する  
ことを許されし人  
人にいふ。四位・  
五位、竝に六位の  
藏人。

修明門院 藤原重子。  
順徳天皇の御母。

るを参らせられたり。この御使の人、何ならむといふかしくて、かたはしほのあけて見るに、錢なり。いと心得ずなりて、さと面うち赤めて、あさましと思へる氣色しるきを、院御覽じおこせて、「朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古より殿上の賭弓といふ事には、これをこそ賭物にはせしか。されば今賭物と聞えたるに、これをしもいだされたるなむ、古の事知り給へるこそいたきわざなれ。」とほゝゑみて宣ふに、さは悪しく思ひけりと、心地騒ぎておぼゆべし。大方この院の上は、よろづの事にいたり深く、御心も花やかに、物に委しうぞおはしましける。

夏の頃、水無瀬殿の釣殿にいでさせ給ひて、氷水めして、水飯やうのものなど、わかき上達部殿上人どもにたまはせて、大御酒まゐるついでにも、「あはれ古の紫式部こそはいみじくはあ

上達部 三位以上の  
人々。但し参議は  
四位なるもこの内  
に入る。  
大御酒 酒のこと。  
大も御も美稱なり。  
紫式部 藤原爲時の

りけれ。かの源氏物語にも、「ちかき川の香魚、西川より奉れる石伏やうのもの御前にて調じて。」と書けるなむ、勝れてめでたきぞとよ。只今さやうの料理仕りてむや。」など宣ふを、秦のなにがしとかいふ御隨身、勾欄のもと近く候ひけるが、うけたまはりて、池の汀なる小笹を少ししきて、白き米を洗ひて奉れり。「ひろはば消えなむとにや。これもけしかるわざかな。」とて御衣脱ぎてかづけさせ給ふ。御土器たびく、聞しめす。何事もめでたく見えさせ給ふ御ありさま、千歳をふとも飽く世あるまじかめり。

(増鏡)

ちろかななる心や見えむます鏡ふるき姿にたち  
はあよばで  
今もまた昔を書けばます鏡ふりぬる代々のあ  
とにかさねむ

(増鏡)

女。實名は傳はらず。源氏物語の作者。  
源氏物語 五十四帖  
光源氏君父子を中心にして、當時の上流社會の有様を寫したる小説。この事は常夏の巻に見ゆ。  
西川 桂川をいふ。  
石伏 川魚の一種。  
御隨身 身分ある人に官より付けらるる護衛の役。  
ひろはば消えむと見ゆる玉笹の上の鏡云々。  
けしかるわざ 變つたことの意味にしてほめたる言葉。  
かづく 衣を賜ふこと。  
増鏡 十卷。後鳥羽天皇の御誕生より後醍醐天皇の御代に至る約百五十年間のことを記したる歴史。作者未詳。

## 二 能樂禮讚

戸川 秋骨

戸川秋骨 名は明三。  
文學者。慶應義塾  
大學教授。昭和十  
四年歿、年七十。

誰もいふ事であるが、能樂の趣は象徴である。決して露骨に、若しくは明白にまた敘述的に表出する事をしない。謠はちやうど楷書の一の字のやうなもので、極めて簡單であるが、それだけ難しく、ごまかしの餘地もなく、同時に象徴的で暗示的であるやうに思はれるが、これは能に於ては一層適切にいひ得る。たとへば能のそれ〴〵の曲を代表する面は、その後にあらゆるものを包藏して居るかと思はれる程に暗示的である。が、更に、その面をつけた演者が、極めて僅か顔を上げるか下げることによつて、多大な意義がそこに表出される。喜怒哀樂が、その面の少しばかりの動かし方によつて顯はされるのである。あの「松風」の曲で、シテが舞臺を少し前

松風 松風といふ海

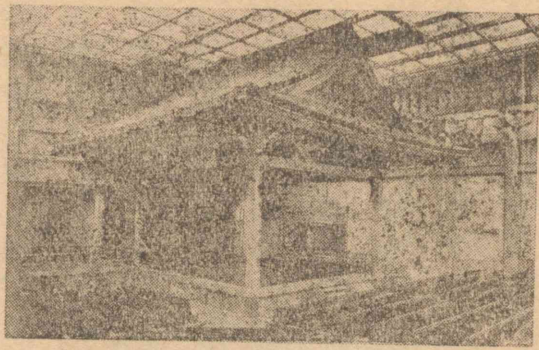
の方に進んで、前方を打ち眺めるやうにちよつと面を左から右へと動かせば、「蘆邊の田鶴こそは打ちさわげ」といふやうな、水邊の靜閑な趣があり〴〵と現出して來る。それは觀者の主觀によるので、さう思ふからさう見えるのだといふ人があるかも知れない。それは如何にもその通りである。極めて主觀的である。しかし、主觀的にさう感じさせるものは、矢張り演出そのものに象徴的な處があるからである。八方にらみなるものは眞正面を向いて居る。眞正面を向いて居るから、左に居る



「松風」のシテ

士乙女を主役とせる能樂の曲名。シテ 能樂の主役の稱。

ものも、右に居るものも、それが自分を見て居るやうに思ふのだ。ちやうどそれと同じ理由で、暗示的に象徴的に色々なものを包蔵してゐるから、それが観者の思ふ通りに見えるのである。

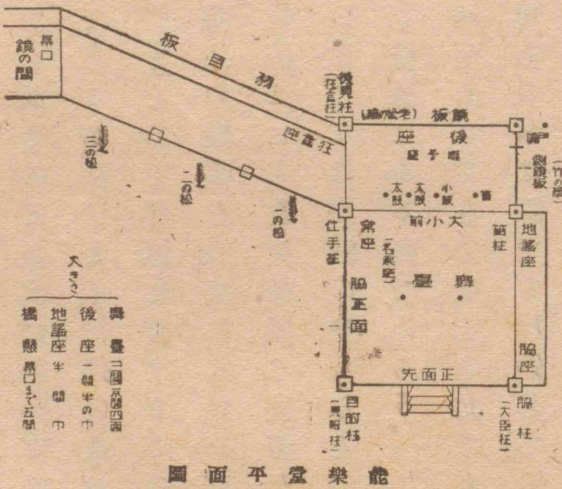


(生賣)堂樂能

なほ謡曲の文字は、實に雑多な文句を集めたやうなものである。その曲と何の縁故もないやうな句が澤山に羅列されてある。しかもそれ等の句が集り集つて、いつとはなしに、曲そのものの心持を出すやうになる。これも主観的なことではあるが、また一種の象徴たる事實であらう。いづれにしても、自然的寫實的ではない。もつともそれはその作成された當

時にあつては矢張り寫實的分子を多分にもつて居たのださうであるが、今日では、殊にそれが能として演じられる場合、全く象徴的になつて居るといはずを得ない。

私は又、自分の狭い見聞を以てすれば、古今の藝術でこの能樂ほど緊張したものはないと思ふ。能樂の演出には極めて微細と思はれる點にまで注意しなければならぬ。それはたゞ緊張によつてのみ得られる。一寸面を動かして喜びを表し、面を下げて悲しみを示す藝術であるから——その面の動かし方に非常な意義が附随す



能樂堂平面圖

百楽 幸若  
 散樂 (蘇樂)  
 三種の能  
 幸若の衰へて  
 散樂が先達  
 して能樂を興す  
 百楽 蘇樂  
 に消格的  
 茶番 狂言  
 平安朝時代  
 能樂と云ふ  
 漸次成立  
 室町時代  
 足利氏に在  
 詠を在る  
 規阿彌流流  
 世阿彌清元

るのであるから、それは緊張しなくてはならない譯である。能樂の曲は、第一神事、第二修羅もの、第三かつらもの、第四現在もの、第五天狗般若類の五種類から成るので、正式にいへば、必ず一度にこの五番を演ずるのであるが、私はよく普通の人が五番を観るに堪へられたものだ、それを異様に感ずるものである。それを観るには六七時間の緊張をつづけなければならぬからである。一曲だけ観るにも宜い加減な疲勞を感ずる次第である。能樂は私に取つては宗教のやうなものであるが、その理由の一は、この緊張味にあるのであらう。緊張味に次いで能樂に缺くべからざるものは、その力である。謡曲が力を主とする聲樂である事は誰でも承知して居る事と思ふが、能樂もあくまでこの力を主として居る。前にいつた緊張味も、この力から來るのであらう。素より力とい

五題材  
 1. 初番物 (神事神佛)  
 2. 修羅物 (武士と魔王)  
 3. 三番物 (女と魔王)  
 4. 現在物 (幽霊又は現在物)  
 5. 天狗物 (鬼神怪異の幸若り)  
 (別に歌舞物あり)

由節を定めて大成す  
 足利氏は武家の式樂と云ふが大成す  
 徳川二百年の毒干之相傳つて大成す  
 三流派  
 規我流  
 宝生流  
 金春流  
 金剛流  
 喜多流  
 四登場者  
 三人(在生) 主人公  
 一人(脇) 副主人公  
 ツレ(連)

つて、たゞ無暗に力むのではない。力んだ聲で謡つた處で、それが立派な謡となるわけのものではないと同様に、たゞ眞面目腐つて力こぶを入れた處で、立派な能が演じられるものではない。その力なるものが、自然に演者の身に體現し、演者の普通に靜かに身體を動かすのが、觀者に非常な力として感じられるやうにならなければ、完全とはいへない。立派な演者なら、たゞ直立して居ても、それが磐石のやうな感を與へる。これは始めて能を見たある人のことであるが、さる演者の能を見て、あの人の立つて居るのは、まるで樹が地から生えて居るやうな感を與へますね。といつた。全くそれ程の力を以て演者は立つて居るのである。立派な演者の踏む足拍子は、そこから火炎が飛立つかと思はれるほどである。しかしこれは、力といふよりも別の能力かも知れない。何

か自然の間に、その根柢をもつて居るある働であるかも知れない。何となれば、武勇を現すもの、怪異を現すものに於ては力といつても差支ないが、その同じ力なるものは、柔かいもの、優しいものにも顯れて居るからである。しかしこれは、能樂に限つたものではなく、光悦や宗達の畫などにも特に目立つ處であるが、能樂にはそれが際立つて顯れて居るやうである。強いものは勿論の事であるが、弱いもの優しいものも自づから有して居る自然の力とでもいふより外に、私は説明の能力をもつて居ない。とにかくこの力こそ、能樂のもつとも緊要な條件の一つである。

(能樂禮讚)

光悦 本阿彌光悦。刀劍鑑定家・畫家。書家。寛永十四年(三九七)歿、年八十二。(一説八十)。宗達 野々村氏。表屋と稱す。名は以悦。畫家。

三 羽衣

ワキ 漁夫白龍  
ワキツレ 同行漁夫  
シテ 天女

ワキ一聲「風早の三保の浦曲を漕ぐ船の浦人さわぐ浪路かな。  
ワキ、サン謡「これは三保の松原に白龍と申す漁夫にて候。  
ワキツレ謡「萬里の好山に雲乍ち起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつづく朝霞、月ものこりの天の原及びなき身の眺にも、心空なるけしきかな。歌「忘れめや、山路をわけてきよ見鴻、はるかに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし、春ならば、吹くもの

風早の云々 萬葉集に「風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の舟人さわぐ浪立つらしも」。  
三保の松原 靜岡縣清水市三保。  
萬里の好山云々 詩人玉屑に「千里好山雲乍起、一樓明月雨初晴」。  
及びなき身云々 續拾遺集に「いかならばなき世とか思ふ見るからに心空なる天の羽衣」。

どけき朝風の松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむる所に、虚空に花ふり、音楽きこえ、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬ所に、これなる松に、うつくしき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。」

ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて歸り候よ。」シテ詞

「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。元の如くにおき給へ。」ワキ詞「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にとゞめおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。」シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。」

「さりとては返したび給へ。」ワキ詞「この御詞をきくよりも、いよく白龍力を得。」詞もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隠し、詞「叶ふまじとて立ちのけば、」シテ詞「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。」ワキ詞「地にまた住めば下界なり、」シテ詞「とやあらん、かくやあらんとかなしめど、」ワキ詞「白龍衣を返さねば、」シテ詞「力およばず、」ワキ詞

「せんかたも、」地謡「涙の露の玉鬘、かざしの花もしをくと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。」

シテ詞「天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひてゆくへしらずも。」地謡「すみ馴れし空にいつしかゆく雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽のなれくし、聲今さらにわづかなる、雁がねの歸りゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の空に吹くまでなつかしや。」

忘れめや云々 續古今集に「忘れずよ清見が關の浪間より霞みて見えし三保の松原」。風向ふ云々 冷泉爲相の歌に「風向ふ雲の浮浪立つと見て釣せぬ先に歸る舟人」。

天人の五衰 天人が命終の時、五つの死滅の異相を生ずるをいふ。その中に頭上華萎の相あり。

天の原の歌 丹後風土記に出づ。

迦陵頻伽 梵語。妙聲鳥と譯す。

「ヲキ詞」いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛  
 はしく候ほどに、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あらうれ  
 しや。こなたへ賜はり候へ。」ヲキ詞「しばらく。承り及びたる  
 天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。  
シテ詞「うれしや。さては天上に還らん事を得たり。このよる  
 こびに、とてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮を廻らす  
 舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。  
ヲキ詞「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでその儘に、天にや上  
 り給ふべき。」シテ詞「いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。  
ヲキ詞「あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ詞  
 「少女は衣を著しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ヲキ詞「天の羽衣風  
 に和し、シテ詞「雨にうるほふ花の袖、ヲキ詞「一曲をかなで、シテ詞「舞

とてもさらばとて  
 もかくても意。  
 月宮 月世界の宮殿。



(衣羽) 美の樂能



ふとかや。地謡東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

クリ地謡それ久かたのあめといつば、二神出世のいにしへ、十方

春霞（春霞）たなびきにけり、（春霞）久方の月

の枝の花や咲くげに、（春霞）花かつら色

めくは春のしるし、（春霞）かや面白や天なら

て、（春霞）ども妙なり、（春霞）天つ風雲の通ひ

路吹きとらよ、（春霞）少女の姿暫し留

まりて、（春霞）この松原の春の色を三保

が崎、（春霞）月清見瀉富士の雲いづれや

春のあけぼの顔ひなみも、（春霞）松風も

のどかなる浦の有様、（春霞）その上天地

は何を隔てん、（春霞）玉垣の内外の神の

夜々のあま少女奉仕を定め役をなす。

女、（地謡）月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世につた

二神 伊弉諾・伊弉  
册の二尊。  
十方 東西南北乾坤  
巽艮上下。

へたる曲とかや。クセ春霞たなびきにけり久かたの月のかつ  
 らも花や咲く。げに花かつら色めくは春のしるしかや。お  
 もしろや天ならで、こゝも妙なり天津風雲の通ひぢ吹きとぢ  
 よ。少女の姿しばしとゞまりて、この松原の春の色を三保が  
 崎月清みがた富士の雪いづれや春の曙たぐひ浪も松風も、の  
 どかなる浦のありさま。その上天地あつちは何を隔てん玉垣の内  
 外の神の御すゑにて、月も曇らぬ日の本や。シテ君が代は、天  
 の羽衣まれにきて、地撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり  
 東歌。聲そへてかずくゝの笙しやう笛ちやく琴きん篋けつ孤雲の外に充ち満ち  
 て、落日の紅は蘇命路の山をうつして、緑は浪に浮島がはらふ  
 嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ南  
 無歸命月天子、本地大勢至。地東遊の舞の曲。シテ或は天  
 つみ空の緑の衣。地又は春立つ霞の衣。シテ色香も妙なり

少女の裳裾。地左右左、さいう颯々の花をかざしの天の羽袖  
 靡くもかへすも舞の袖。キリ東遊のかずくゝに、その名も月  
 の宮人は、三五夜中のそらに又満願眞如の影となり、御願圓滿  
 國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さ  
 る程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松  
 原、浮島が雲のあしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ  
 み空の霞に紛れて失せにけり。

(觀世謠本)

春霞云々 後撰集に、  
 「春霞たなびきに  
 けり久方の月の桂  
 も花や咲くらむ。」  
 天津風云々 古今集  
 に、「天津風雲のか  
 よひぢ吹きとぢよ  
 少女の姿しばしと  
 どめむ。」

君が代は云々、拾遺  
 集に、「君が代は天  
 の羽衣まれにきて  
 撫づともつきぬ巖  
 なるらむ。」

蘇命路の山 須彌山  
 ともいふ。佛經に  
 出づ。

本地大勢至 月天子  
 の本地は勢至菩薩  
 であるといふこと。

勢至は阿彌陀如来  
 の脇士で智慧を司  
 り、も一方の脇士  
 觀音が慈悲を司る。

四 入間川

大名 殿斗目・素襖・大臣烏帽子・小さ刀。

太郎冠者 半袴・上下、太刀持つ。

入間 長袴・小さ刀。

大名八幡大名。ながく在京致すところに、訴訟思のまゝに相叶ひ、このやうな嬉しいことはない。まづ太郎冠者を呼出し、喜ばせうと存ずる。やい／＼太郎冠者あるかやい。冠者はあ。大名居たか。冠者お前に居ります。大名早かつた。汝を呼出すこと、別のことではない。ながく在京するところに、訴訟思のまゝに相叶ひ、追つ付け國許へ下る。何とめでたいことではないか。冠者これは御意の通り、おめでたいこととござる。大名その儀ならば、追つ付け下らう。供をせい。冠者畏まつてご

ざる。大名(道行)やい／＼汝は精を出して、よう奉公したほどに、國許へ行たらば、馬に乗せうぞ。冠者それは忝うござる。

大名さりながら、馬に乗るまでは牛に乗れといふ。まづ牛に乗せうぞ。冠者それは兎も角もござる。大名これは戲言。馬に乗せうぞ。冠者いよく忝うござります。大名やい太郎冠者向うに眞白に見ゆるは富士山であらうなあ。冠者成程富士山でござる。大名三國に隠れもない名山ぢやと云ふが見事な山ぢやなあ。冠者左様でござります。大名(道行)さあ来い、さあ来い。はや駿河の國へ来た。急げ／＼。やあ、これは渺々とした野へ出た。定めてこれが武藏野であらう。さても／＼広いことぢやなあ。冠者廣い野でござります。大名もはや國許へも程近い。さあ来い、さあ来い。冠者参ります。大名やあ、これに大きな川がある。これは何といふ川ぢや。上りにもあつた川か

馬に乗せうぞ 身分の無きものは馬に乗ることならざるが當時の制なり。

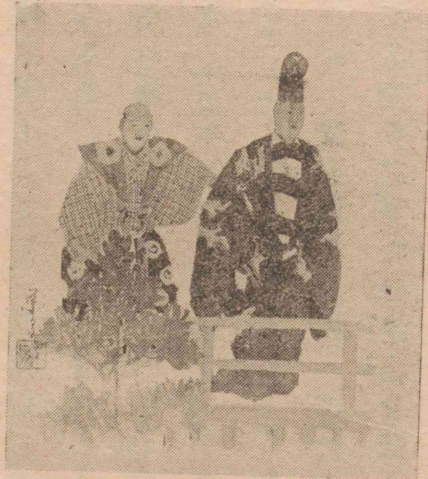
三國 日本・唐・天竺。

覚えぬ。冠者、されば覚えませぬ。大名、誰ぞ在所の者が見えたら尋ねたい。

入間何某、これは入間に隠れもない何某でござる。川向うへ用所あつて参る。大名、やあ、向うに人が見ゆる。尋ねて見よう。やい、向うな者に物が問ひたいやい。入間、これは如何な事。この邊で、某にあの如く云ふ者は覚えぬ。返事の致し様がある。やい、物が問ひたいと云ふはこちの事か。何事ぢや。やい。大名、これは憎い奴の。太郎冠者や太刀をおこせい。冠者、「これは何となされます。大名、いや、某に今の様な慮外をぬかす。打切つてくれう。冠者、いや、左様でござらぬ。お國許でこそこなたを見知りませう。こゝもとでは、見知らぬによつての事でござる。言葉を直してお尋ねなされませ。大名、それもさうぢや。言葉を直さう。まうし、向うなお方に物が問ひた

うござる。入間、これは如何なこと、言葉を直した。まうし、物が尋ねたいと仰せらるゝは、此方のことでござるか。何事でござるぞ。大名、さても、可笑しいことかな。言葉を直した。川の名を問はう。まうし、まうし、この川は何と申す川でござる。

入間、これは入間川と申します。大名、やい、太郎冠者、入間川ぢやと云ふわ。冠者、さやうでござる。大名、渡り瀬を問はう。まうし、



入間川

この川は何處もとを渡ります。又こなたの名は何と申す。入間、身どもは、入間の何某でござる。この川は、これより上を渡ります。此處は深うござる。大名、やい、何某ぢやと云ふわ。

最前腹を立てたが道理ぢや。渡り瀬は上を渡ると云ふ。さあさあ知れた。渡れ〜。冠者いや〜其處は深いと申しませう。御無用でござる。大名いや〜身どもが合點ぢや。此處を渡れ〜。入間まうし〜其處は深うござる。御無用ぢや。止めさせられ、止めさせられ。大名さあ〜太郎冠者、渡れ〜。これは如何な事。南無三寶、やれ、流れるわ、流れるわ。入間はあ、これは深いと申すに。笑止な。大名おのれ憎い奴の。やることではないぞ。成敗する。入間これは何とめさるぞ。大名、最前に川の名を問へば入間川といふ。渡り瀬はと問へば、此處は深い、上へ廻れといふ。總じて入間の言葉には逆語さかことばを使用により、此處を深いと云ふは浅いと云ふこと、上へ廻れといふは此處を渡れと云ふ事と心得て渡つたれば、諸侍に欲しうもない水をくれたほどに、成敗するぞ。入間扱はこなたには、入間

南無三寶 驚きの甚だしきにいふ詞。どうぞ三寶を守護し給への意。

入間言葉 入間やうともいふ。反對に言ふと意を逆にいふとの二様あり。

言葉をよく御存じでお遣ひなさるゝな。大名なか〜知つて居る。入間何と成敗せうと仰せらるゝは定さだでござるか。大名なかなか定ぢや。入間とてもものに御誓言で承りませう。大名「何がさて、弓矢八幡成敗いたす。入間あら心安や。ざつと濟んだ。大名これは如何な事。成敗せうと云へば、あら心安や、ざつと濟んだと云ふは、どうしたことぢや。入間さればそのことぢや。こなたは入間言葉を御存じでお遣ひなさるゝによつて、成敗せうと仰せらるゝは、弓矢八幡成敗せまいと云ふことぢやと思つて、あら心安や、ざつと濟んだと申すこととござる。大名これではうどした。助けずばなるまい。冠者お助けなされたがようござりませう。大名これ〜わごりよの命を、最早助くるでもおりないぞ。入間身共が命を助けもなさらねば、忝うもござらぬ。大名(大笑あり)「さても〜をかしいことかな。やい

弓矢八幡 弓矢の道の祖神たる八幡に誓を立つる意。

やい太郎冠者、命を助かつて忝うないと云ふは、可笑しいことではないか。何ぞ遣つて入間言葉を聞かう。これく、この扇は京折りでもなければ、そなたへ進ずるでもおられないぞ。入間京折りでもござらぬ扇を下されも致さねば満足にも存じませぬ。大名(大笑あり)、さてもく、可笑しい。物を貰うて嬉しうないと云ふは。これく、この太刀かたなは重代なれども遣るでもおられないぞ。入間重代でもござらぬ太刀かたなを下されもなされねば、祝著にも存ぜぬ。大名(大笑あり)、なうく、可笑しや、可笑しや。何をやつても嬉しうないと云ふ。太郎冠者も何ぞ遣つて、入間言葉を聞かぬか。冠者、いや、私は何も遣る物がござらぬ。大名、やあ、この袴小袖もやつて、入間言葉を聞かう。さあく、脱がせ、脱がせ。なうく、この袴小袖は、水に濡れも致さねば、其方におまらするでもおやりやらぬぞ。入間、これは結

京折り 京都にて折りたる扇は上等の品なり。

構にもない袴小袖を下されも致さねば、嬉しうもござらぬ。大名、まだ嬉しうないといふ。さてもく、可笑しいことかな。入間言葉は面白いものかな。

入間一段の仕合はせでござる。すかさうと存ずる。大名、なうなう、これく、先づ戻りやるな。入間、いや、これを置いて参るまい。大名、いや、用がおりにない。先づ戻りやるな。入間、何事でもおりにやる。大名、何と、その如くに色々の物貰うて、眞實は嬉しうか、嬉しうないか、おしやれ。入間、いや、忝うもござらぬ。大名、いや、いや、それは入間やう。最早入間言葉をさらりと捨てて、眞實は嬉しうか、嬉しうないか、おしやれ。入間、眞實は思しめしてもござらうぜ。この如くに太刀刀袴小袖まで下されて、何がさて忝うもござらぬ。大名、はてさてくだい人ぢや。その入間言葉をさらりと止めて、眞實をおしやれ。入間、眞實は何かござらう。

入間やう 入間風。

この如くに結構なもの、さまざま下されて、忝うないと云ふことがござらうか。身にあまりて忝うござる。大名、何と、忝い。入間、なか〜。大名、忝いとは、忝うないと云ふことであらう。こちへ返せ。入間、いや〜遣ることでないぞ。大名、どうでも返さぬか。さあ取つたぞ。入間、やい〜、たらしめ。どこへやることでないぞ。

やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ。

(狂言記)

狂言記 元禄年間刊  
行せられたる繪入  
狂言記の中。

入間様又入間詞といふも同じ逆詞なり。是に二種あり、一は意を逆に言ふなり。一は詞を逆にしたるなり。意を逆にいふとは、花散れ、月くもれなどの類なり。詞を逆にするとは、花の雲といふべきを雲の花といひ、月の鏡を鏡の月といふ類なり。

(柳亭種彦)

五 豊臣太閤

三 上 参 次

從來、豊太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記、繪本太閤記等の書にして、三國志、漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍描き出されたれども、其の他の側面は、殆ど全く忘却せられたるが如く、間、又いみじき誤謬をさへ流布したり。太閤が無學文盲なる人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。磨けば益、光り、鑽れば彌、堅し。眞に偉大なる人物は仔細に研究するに隨ひて、一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決し

三上参次

史學者。  
文學博士。東京帝國大學名譽教授。  
昭和十四年歿、年七十五。

眞書太閤記

三百六十卷。作者不詳。  
繪本太閤記 八十四卷。作者不詳。

三國志

通俗三國志七十五卷。晉の陳壽の撰に依る三國志六十五卷を和譯したるもの。

漢楚軍談

通俗漢楚軍談。十五卷。夢梅軒章峯の著。

て無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑、太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に、舊大名たりし華族の諸家、古社寺舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾千なるを知らず。公の祐筆たりし太田和泉守牛一、大村法橋由己、楠長諳正虎等の文章家の手に成りたりと思しき、雄健にして生氣に富める文書、其の大部分を占めたりとはいへ、確に太閤の自筆なる色紙、短冊、消息の類もまた少なしとせず。西に東に遠征せる先より母なる大政所、夫人なる淺野氏、若しくは、一子秀頼等に贈りたる書狀の如きは、親子夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。



秀吉畫像

太田和泉守牛一 尾張の人。信長・秀吉に仕ふ。信長記、天正記などの著あり。大村法橋由己 播磨の人。柴田勝家・秀吉に仕ふ。楠長諳正虎 足利義輝・信長・秀吉に仕ふ。大政所 攝政關白の母。秀吉の大政所は尾張國御器所村(今名古屋市中區御器所町)の人。木下彌右衛門に嫁して秀吉を生む。文祿元年(三三)薨、年八十。淺野氏 尾張國中村

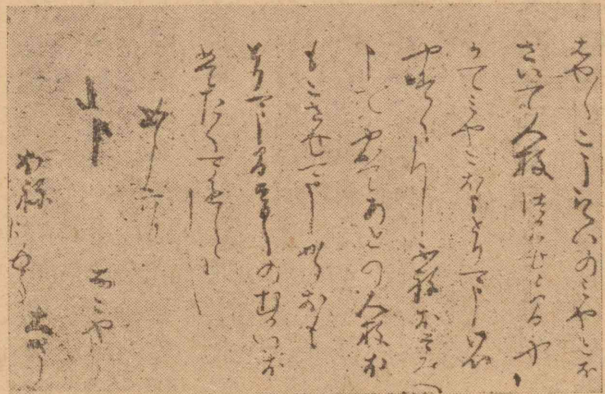
書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢へてする能はざれ、頗る圓熟したるものにして、その中、自ら俊拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字も亦用ひられたるが、其の崩し方も無下に卑しからず。嘗て習字せしことの無き人には決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、とみには思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太閤の簡易を喜び、敏捷を尙びしをいへるにて、少しも漢字を知らざりしをいへるにはあらず。軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の鍛鍊なしといへども、天真爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滯する所なし。而して、其の間に溢るゝばかりの愛情あらはれ

(今名古屋市中區中村町)の人。杉原(後に木下)定利の二女、淺野長勝の養女。幼名れ、後に寧子。北政所と稱す。

江村專齋 名は宗具。倚松庵と號す。儒者・醫師。寛文四年(三四)歿、年百。その談話をその孫伊藤宗恕の筆せしものを「老人雜話」といふ。二卷。



て、趣味の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年小田原在陣の中に、母に寄せたる書の中に、「そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わか御なり候て可給候たのみ申候。」の語あり。千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり給はれ。」の一語より適切なるものはあらず。又その政所淺野氏への書の中には、「ねんごろに文給はり御げんざんのこゝろしてねんごろにみ候。ことし内にはひまあけ可參候。心やすく候べく候。かならずとし内に參候て御目にかゝり、つもる御物がたり可申候。」



秀吉の筆蹟

天正十八年 後陽成天皇の御代(三五〇)。

秀吉の筆蹟

はやく「こうらいのみやこおさいて人数つかはせ候間、やがてみやこおもとり可申候御心やすく候へく候ふれおそろへ申候てやがてあとの人数おもとり可申候からおもとり可申候間、おもしろむかいおめてたく可進之候

五月六日 かしく  
なこやふり 大かう  
おれに返事

等の句あるなり。祐筆の手に成りたる文書の中にも、彼處此處に太閤の口授に係れりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも、古文書の上より觀察するとき、太閤は又母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。

さて、太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十四日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛りと咲亂れたるを賞でて、其の下に徘徊せり。正親町天皇之を聞しめし、やがて、畏くも勅使を遣はし、花の折枝に一首の御製を添へて下し賜ひしかば、太閤感謝に堪へず、即ち

古文書 古い文書・記録をいふ。

正親町天皇 第百六代天皇。御在位弘治三年(三二七)―天正十四年(三五〇)。文祿二年(三五三)崩御、御壽七十七。

忍びつゝ霞とともにながめしもあらはれけりな  
花の木のもと

と返歌を上られき。又天正十六年の事なりけり、北山に狩して龍安寺に憩へる事ありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却つて淡雪のちらちらと降來りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は花をおそしとさ  
そひ來ぬらん

と詠まれき。逸興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

吉野山たれとむるとはなけれども今宵も花のか  
げにやどらん

と吟じ、藏王堂にては、

歸らじとおもふ家路を入相のかねこそ花の恨な  
りけれ

と歌はれたり。巧を弄ばずして、なかくに雅趣に富み、格調もまた平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。

此の他、紀州征伐のときには和歌浦、玉津島にて、小田原陣の折には清見瀉にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少なからず。天正十六年の聚樂第への行幸のときは勿論、醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては、大宮人の昔を忍ばしめ、又時としては、古英雄の横槩賦詩の面影を想はしむ。而して、功成り名遂げたる此の千古の偉人にも、亦無常を感じたる事のありてや、

露とちり雫ときゆる世の中に何とのこれる心な

龍安寺 臨濟宗の古刹。京都市右京區龍安寺御陵下町にあり。細川勝元の遺囑によりその趾を寺とし龍安寺といふ。後文明十八年(三三〇)その子政元の再建により面目を新にす。

文祿三年 後陽成天皇の御代(三五〇)。關屋の花 吉野町の總門より下の櫻。

藏王堂 吉野町にあり、藏王權現を祭る。又金峯山神社ともいふ。

紀州征伐 天正十三年根來寺を討つ。

玉津島 和歌山市和歌浦町玉津島神社。小田原陣 天正十七年北條氏を討つ。

清見瀉 今の東海道線興津驛の海灣。名護屋 佐賀縣東松浦郡呼子町の西の村。太閤征韓の本營。

聚樂第 京都市の西北、昔の大内裡の趾に當る。御幸は四月十一日なりき。醍醐 京都市伏見區。

るらん

と嘆きし事もありしが、慶長三年八月薨去に際して

露とおき露と消えにし我が身かななにはのこと

は夢のまた夢

といふ辭世の短冊をとゞめられき。げに、太閤は伊達政宗、細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうちの錚錚たる者なりしなり。

確に太閤の自筆と認めらるゝ消息又は短冊にして、予が原本を目撃したるものみにて、三四十はあるならん。加之、太閤は、時には學者をして往事を談ぜしめて之を聴き、又、禪學の書の講義をも聴きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は決して無學文盲ならざりしなり。(史學雜誌)

醍醐寺は眞言宗醍醐派の本山。  
大佛 洛東方廣寺。  
秀吉の創建。

伊達政宗 仙臺藩主。  
歌人。寛永十三年(一六三六)歿、年七十二。  
細川忠興 豊前藩主。  
藤孝(岡齋)の子。  
三齋と號す。歌人。  
正保二年(一六五〇)歿、年八十三。

### 六 生花の美

岡倉 覺 三

春の東雲のふるへる薄明に小鳥が木の間でほがらかな調子で私語いてゐる時、諸君は彼等が其の仲間に花のことを語つてゐるのだと感じたことはないだらうか。人間にいつて見れば、花を觀賞することは、どうも詩と時を同じくして起つてゐるやうである。無意識の故に麗しく、沈黙の爲に芳しい花の姿によつて、原始人は粗野な自然の必要を超越して人間らしくなつた。彼が不必要な物の微妙な用途を認めた時、彼は藝術の國に入つたのである。

喜びにも悲しみにも、花は吾等の不斷の友である。花と共に飲み共に食ひ、共に歌ひ、共に踊り、共に戯れる。花を飾つて結婚の式を挙げ、花を以て命名の式を行ふ。花がなくては死

岡倉覺三 東京美術  
學校長。後米國ホ  
ストン博物館東洋  
部長。日本美術復  
興の功勞者。大正  
二年歿、年五十三。

んでも行けぬ。百合の花を以て禮拜し、蓮の花を以て冥想に入り、薔薇をつけ菊花をつけて戦列を作り、そして突撃した。我々は花なくてどうして生きて行かれよう。花を奪はれた世界は考へて見ても恐しい。花は病める人の枕邊に異常な慰安を齎し、疲れた人々の暗の世界に喜悅の光を齎す。又その澄みきつた和かい色は、丁度美しい子供を熟々眺めてゐると、失はれた希望が思ひ起されるやうに、失はれようとしてゐる自信を回復してくれる。

西洋の社會に於て花を無やみに無駄にすることは、驚き入つたものである。舞踏室や宴會の席を飾るために日々伐取られ、翌日は投げ捨てられる花の數はなか／＼莫大なものに違ひない。一緒に繋いだら一大陸を花輪で飾ることも出来るやう。西洋に於ては、花を飾るのは富を表はす一時的美觀の

一部、即ちその場の思ひつきであるやうに思はれる。これ等の花は皆、その騒の濟んだ後はどこへ行くのであらう。萎れた花が無情にも糞土の上に捨てられてゐるのを見る程、世にも哀れなものはない。

どうして花はかくも美しく生まれて、しかもかくまで薄命なのであらう。蟲は刺すことが出来る。最も温順な動物でも追ひつめられると戦ふものである。又ボンネットを飾るために羽毛を狙はれてゐる鳥は、その追手から飛去ることが出来る。人が上衣にしたいと貪る毛皮のある獸は、人が近づけば隠れることが出来る。悲しい哉！翼ある唯一の花は蝶のみで、他の花は皆殺戮者に會つてはどうすることも出来ない。彼等が斷末魔の苦しみに叫んだとても、その聲は我等の無情の耳へは達しない。我々は黙々として我等に仕へ我

ボンネット 婦人用の縁なし帽子。

等を愛するものに對して、絶えず残忍であるが、これが爲に、これ等の最もよき友から我々が見捨てられる時が来るかも知れない。諸君は野生の花が年々少なくなつてゆくのに氣はつかないだらうか。それは彼等の中の賢人共が、人がもつと人情のあるやうになるまでこの世から去れと彼等に言つてきかせたのかも知れない。多分彼等は天へ移住してしまつたのであらう。

草花を作る人の爲には大いに肩を持つてやつてもよい。植木鉢をいぢる人は、花鉢の人よりも遙かに人情がある。彼が水や日光について心配したり、寄生蟲を相手に争つたり、霜を恐れたり、芽の出やうがおそい時は心配し、葉に光澤が出て來ると有頂天になつて喜ぶ様子を窺つてゐるのは楽しいものである。東洋では花卉栽培の道は非常に古いものであつ

て、詩人の嗜好とその愛好する花卉は屢、物語や歌にしるされてゐる。唐宋の時代には、陶器術の發達に伴なつて、花卉を入れる驚くべき器が作られたといふことである。といつても植木鉢ではなく、寶石を嵌めた御殿であつた。花毎に、事へる特使が派遣せられ、兎の毛で作つた軟かい刷毛でその葉を洗ふのであつた。牡丹は正装した美しい侍女が水を與ふべきもの、寒梅は青い顔をしてほつそりとした修道僧が水をやるべきものと書いた本がある。

由來東洋では、か弱い花を保護するためには非常な警戒をしたものであつた。唐の玄宗皇帝は、鳥を近づけないために花園の樹枝に小さい金の鈴をかけておいた。春の日に宮廷の樂人を率ゐて出で、美しい音楽で花を喜ばせたのも彼であつた。義經の書いたものだといふ傳説のある奇妙な高札が

唐 支那の國號の一。推古天皇の二十六年(三七〇)より醍醐天皇の延喜七年(一〇六七)まで。  
宋 支那の國號の一。村上天皇の天徳四年(一一三〇)より後宇多天皇の弘安二年(一一九一)まで。

玄宗皇帝 唐の第六代の天子。

或る寺院に現存してゐる。それはある不思議な梅の樹を保護するために掲げられた揭示であつて、尙武時代の凄いをかし味を以て我等の心に訴へる。梅花の美しさを述べた後「一枝を伐らば一指を剪るべし」といふ文が書いてある。花を無暗に伐り捨てたり、美術品をば臺無しにする者共に對しては、今日に於ても願くはかういふ法律が實施せられよかしと思ふ。

然し鉢植の花の場合でさへ、人間の勝手氣儘な事が感ぜられる氣がする。何故に花をその故里から連れ出して、知らぬ他郷に咲かせようとするのであるか。それは小鳥を籠に閉ぢこめて、歌はせようとするのも同じではないか。蘭類が温室で、人工の熱によつて息づまる思をしながら、なつかしい南國の空を一目見たいとあてもなく憧憬れてゐると誰が知つてゐよう。

花を理想的に愛する人は、破れた籬の前に坐して野菊と語つた陶淵明や、黄昏に西湖の梅花の間を逍遙しながら、暗香浮動の趣に我を忘れた林和靖の如く、花の生まれ故郷に花を訪ねる人々である。周茂叔は、彼の夢が蓮の花の夢と混ざる様に、舟中に眠つたと傳へられてゐる。この精神が光明皇后のしかし餘りに感傷的になることはやめよう。花を徒費することははいましめつゝ、もつと壯大な氣持にならうではないか。老子曰く「天地不仁」と。弘法大師曰く「生生生暗生始死死死死冥死終」と。我々はいづれに向つても「破壊」に面するのである。變化こそは唯一の永遠である。古きものの崩壞によつてのみ、改造が可能となる。拜火教徒が火中に迎へたものは、總べてを吞噬するもの「の影であつた。今日でも、神道

陶淵明 名は潛。東晉の詩人。  
林和靖 名は逋。宋の隱君子。  
周茂叔 周濂溪。宋代道學の大家。

老子 漢司馬遷の「史記」に、楚の苦縣厲郷曲仁里の人。て名は耳、字は聃、姓は李氏とあり。  
弘法大師 僧空海。日本眞言宗の祖。  
高野山を開き金剛峯寺を建つ。仁明天皇の承和二年（一〇五〇）寂。年六十二。

の日本人がその前に平伏すところのものは、劍魂つるぎたましひの氷のやうな純潔である。神祕の火は我等の弱點を焼きつくし、神聖な劍は慾情の絆を斷つ。我等の屍灰の中から天上の望と云ふ「不死の鳥」が現れ、慾情を脱した一層高い人格が生まれ出て來る。

花をちぎる事によつて、新たな形を生み出して、人の心を高尚にする事が出来るならば、さうしてもよいではないか。我が花に求むる所は、たゞ美に對する奉納を共にせん事にある。我々は「純潔」と「清楚」に身を捧げる事によつて、その罪亡ぼしをしよう。かう云ふ原理で、茶人達は生花の法を定めたのである。

我が茶や花の宗匠の仕方を知つてゐる人は、誰でも彼等が宗教的の尊敬をもつて花を見る事に氣がついたに違ひない。

彼等は一枝一條もみだりに伐取る事をしないで、己が心に描く美的配合を目的に、注意深く選擇する。彼等は、若し萬一絶對に必要な度を越えて伐取る様な事があると、これを恥とした。これに關聯して言つてもよいと思はれる事は、彼等はいつても、多少でも葉があればこれを花に添へておくと云ふ事である。と云ふのは、彼等の目的は花の生活の全美を表はすにあるから。此の點については、その他の多くの點に於けると同様、彼等の方法は西洋諸國に行はれるものとは異なつてゐる。かの國では、いはば胴のない花梗こもと頭だけが亂雜に花瓶にさしこんであるのをよく見受ける。

茶の宗匠が花を満足に生けると、彼はそれを床の間に置く。その効果を妨げる様な物は一切その近くにはおかれない。たとへ一幅の畫でも、その配合に何か特殊の審美的理由がな

ければならぬ。花はそこに王位についた皇子の様に坐つてゐる。そして客やお弟子達は、その室に入るや、先づこれに丁寧な御辭儀をしてから始めて主人に挨拶をする。花が色褪せると、宗匠は懇にそれを川に流し、又は丁寧に地中に埋める。その靈を弔うて墓碑を建てる事さへもある。

花道の生まれたのは十五世紀で、茶の湯の起つたと同時にしく思はれる。我が國の傳説によると、始めて花を生けたのは昔の佛教徒であると言ふ。彼等は生物に對する限りなき心遣りのあまり、暴風に散らされた花を集めて、それを水桶に入れたといふことである。然し茶人達の花の尊崇は、唯彼等の審美的儀式の一部をなしたに過ぎないのであつて、それだけが獨立して別の儀式をなしてはゐなかつたと言ふ事を忘れてはならぬ。生花は茶室にある他の美術品と同様に、裝飾

の全配合に従屬的なものであつた。故に石州は「雪が庭に積んでゐる時は白い梅花を用ひてはならぬ。」といふ規定をした。「騒々しい花は無情にも茶室から遠ざけられた。茶人の生けた生花は、その場所から取去れば本來の趣旨を失ふものである。」と言ふのは、その線や釣合は特にその周圍のものと配合を考へて工夫してあるのであるから。

花を花の爲に崇拜する事は、十七世紀の中葉、花の宗匠が出る様になつて起つたのである。さうなると茶室には關係なく、唯花瓶が課する法則の他には全く法則がなくなつた。新しい考案、新しい方法が出来る様になつて、これ等から生まれ出た原則や流派が澤山あつた。

しかし我等は花の宗匠の生花よりも、茶人の生花に對してひそかに同情を持つ。茶人の花は、適當に生けると藝術であ

石州 片桐石見守。  
名は貞昌。石州流  
茶道の祖。延寶元  
年(一三三三)歿、年六  
十九。



つて、人生と眞に密接な關係を持つてゐるから我々の心に訴へるのである。茶人達は、花を選択すること、彼等の爲すべきことは終つたと考へて、その他のことは花自らの身の上話にまかせた。晩冬の頃茶室に入れば、野櫻の小枝に蕾の椿の取りあはせてあるのを見る。それは去らんとする冬の名残と、來らんとする春の豫告を配合したものである。又いらいらするやうな暑い夏の日、晝の御茶に行つて見れば、床の間の薄暗い、涼しい所にかゝつてゐる花瓶には、一輪の百合を見るであらう。露の滴るその姿は、人生の愚かさを笑つてゐるやうに思はれる。

花の獨奏は面白いものであるが、繪畫、彫刻の司伴樂となれば、その取りあはせには人を恍惚とさせるものがある。石州は嘗て湖沼の草木を思はせるやうに水盤に水草を生けて、上の壁には相阿彌の描いた、鴨の空を飛ぶ繪をかけた。紹巴といふ茶人は、海邊の野花と漁家の形をした青銅の香爐に配するに、海岸の淋しい美しさを歌つた和歌を以てした。その客人の一人は、その全配合の中に晩秋の微風を感じたと記してゐる。

かうして見ると花御供の意味が充分に分る。彼等は人間のやうな卑怯者ではない。花によつては死を誇とするものもある。たしかに日本の櫻花は、風に身を委せて片々と落ちる時、これを誇るものであらう。吉野や嵐山の、薫る雪崩の前に立つたことのある人は、誰でもきつとさう感じたであらう。寶石をちりばめた雲の如く飛ぶことしばし、やがて水晶の流の上に舞ひ、笑ふ波の上に浮かびながら、いざさらば春よ、我等は永遠の旅に行く。」といふやうである。

(茶の本)

相阿彌 中尾氏。名は眞相。室町時代の畫家。花道家。大永五年(一六二五)歿。  
紹巴 本姓松村氏。その師里村昌休の家を繼ぎ、里村紹巴。連歌の大家。又茶道を千利休に學ぶ。慶長七年(一六〇二)歿、年七十九。

### 七茶境

奥田 正造

主客ともに世塵のけがれを洗ひ去つて、静寂の中、相和し相敬し、油然として樂しみの心に叶ふとき、之を茶境といふ。

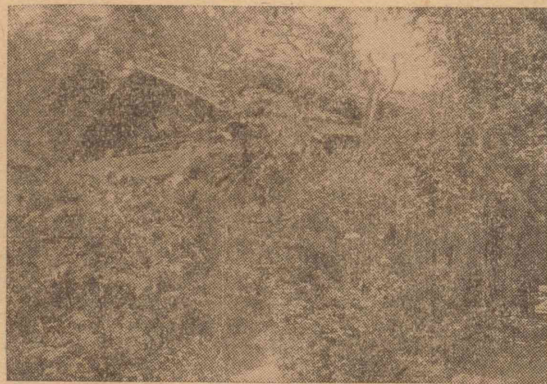
降りつみし雪の面白さに、天王寺屋宗久、不時に利休の庵をおとづれた。いまだ曉を催さざるに、門の戸は既に細目にあけられてゐた。案内を乞うて腰掛に至れば、庵をもるゝ名香、静かな路地に薫つて、その趣一入である。迎へられて席に入れば、已に松風の音さわやかである。閑談暫く時をうつす間に、勝手の戸を開く音がして、人のけはひがした。利休は「かゝる晨こそ醒井の水をと思ひ、汲みに遣はせしものはや歸り候ひつらん、とてもものに釜を改めて一服参らせ候べし。」といひつゝ、釜をあげて水屋へ立つた。宗久は爐邊にうちより、

奥田正造 東京帝國大學哲學科出身、成蹊高等女學校長、明治十七年生。

宗久 今井氏。名は久秀。茶道を武野紹鷗に學ぶ。  
利休 千氏。名は宗易。千家流茶道の祖。天正十九年(三五)歿、年七十一。

醒井 京都市下京區醒ヶ井通りにありし名水。

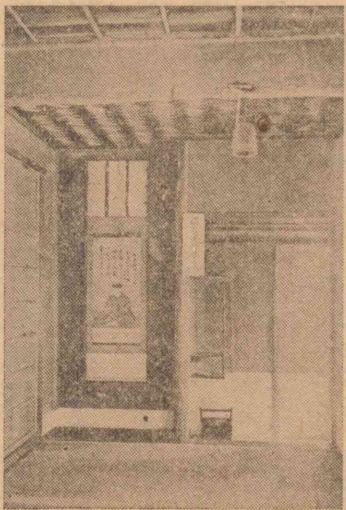
炭のながれの見事さにはしばし見とれてゐたが、心づいて道幸の内を見ると仕込んだ炭斗があつた。取出し、炭二つ三つさしくべて利休を待つた。やがて水を改め、濡釜として運び出した利休にむかひ、炭のながれ誠に見事には候ひしかど、いづれ火相を御改めのことと思ひより候まゝ、炭二つ三つさしくべ候。」と挨拶した。利休はその心入れを感じ、かゝる人と茶をしてこそ、雪の晨の味も一入なれと喜んだ。



京都西行庵茶室

相和相敬の境なれば、勿論客にも客としての働が大切ではあるが、主人の心づくしが主であるだけに、主人の一舉一動に

は能敬能清の眞がこもつて、茶境をして俗事雜境に陥らしめぬ様に心がけ、手前に一點のゆるみのない様につとめねばならない。柳生但馬守が片桐石見守の手前を見て、尙この境に入り得るか。」と驚かれたといふ事である。身心をねるとい



利休茶室内部

ふ上から見れば、そのねり上げたものは、劍を持つ手から始めても、茶杓を清む手から始めても、別に変りのある筈はない。併しこのゆるみのないとは、自

らも窮屈になり、客も窮屈にせよといふ意味ではない。主客一點のゆるみのない姿の裡に、共に煩思雜慮の走作を拂つて、主人は客の心となり、客は主人の心となり、主客一如に歸する

事をいふのである。煩思雜慮は手前を亂す源である。それを除くためには練習がいる。その練習の結果純一無雜の境に悟入し得るのである。茶道で手前の習熟といふのは、運び、扱ひ等が機械のやうに出来るといふことではない。心の働を加へて工夫した結果、和敬清寂に一如たる心身を作り上げることである。主客とも相和相敬し、能清能寂となるのである。

利休の朝顔が見事だといふ評判を聞いて、紹鷗は拜見を所望した。利休はこの仰せを喜び、日を約して師をその庵に請じた。定日となり、紹鷗その庵に至れば、路地には朝顔の影も形もない。意外の感に打たれつゝ、席に入れば、床の花入に咲いた一輪の朝顔が、色も一入あざやかに師を迎へた。紹鷗は床前に坐し、膝を打つて之を賞歎した。利休は凡ての朝顔を

柳生但馬守 名は宗矩。新陰流剣法の名家。正保三年(三三〇)歿、年七十六。  
片桐石見守 名は貞昌。石州流茶道の祖。延寶元年(三三三)歿、年六十九。

紹鷗 武野氏。名は仲村。茶人。弘治元年(三五五)歿、年五十三。

刈りつくし、只一輪に、迎ふる人と迎へらるゝ人との心づくしを集中して、主客一如の歸結を作り出だしたのである。紹鷗が「この心入れとても及ぶ處にあらず。」というたのも無理はない。

かく時刻を擇び、形式を異にして工夫せらるゝ茶會で開かるゝ茶境を、器物の飾り付けや案配で事すみたりと思ふのは、主客ともに至らぬが故である。一期一會の思をやどして、萬事龜末なきやう實意をつくす主人のすゝめに、客も何一つおろそかならぬを感じ、自ら難値難遇の喜びを味はふ時、主客歴然として、而も主客一如たる境が開かれる。これを眞の茶境といふ。

(茶味)

### ハ 風雅の誠

松尾芭蕉

百骸九竅の中に物有り、かりに名付けて風羅坊といふ。誠にうすもののかぜに破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。ある時は倦みて放擲せん事をおもひ、ある時はすゝむで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゝかうて是が爲に身安からず。しばらく身を立てむ事をねがへども、これが爲にさへられ、暫く學んで愚を曉らん事をおもへども、是が爲に破られ、つひに無能無藝にして只此の一筋に繋る。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其の貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。

松尾芭蕉 伊賀の人。正風の祖。元禄七年(三十四)歿、年五十一。

西行 俗名佐藤義清。鎌倉初期の歌僧。建久元年(八五〇)歿、年七十三。  
宗祇 飯尾氏。室町時代の連歌の大家。文龜二年(一五〇二)歿、年八十二。  
雪舟 俗姓小田氏。諱は等楊。室町時代の畫僧。文龜二年歿、年八十三。

おもふ所月にあらずといふ事なし。像花かたはにあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて造化にしたがひ造化にかへれとなり。

(笈の小文)

去年の秋かりそめに面をあはせ、ことし五月の初はつ、深切に別れをしむ。其のわかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其の器、畫を好み、風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。畫は何の爲に好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其のまなぶ事二にして、用をなす事一なり。まことや君子は多能を恥づと云へれば、品ふたつにして、用一なる事感ず可きにや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。され

ども師が畫は精神徹に入り、筆端妙をふるふ。其の幽遠なる所、予が見る處にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用ふる所なし。たゞ釋阿西行のことばのみ、かりそめに云ひちらされしあだなるたはぶれごと、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかも悲しびをそふると、のたまひ侍りしとかや。さればこの御ことばを力として、其の細き一筋をたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人の求めたる所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も亦これに同じと云ひて、燈をかゝげて、柴門の外に送りてわかるゝのみ。

(柴門辭)

九 俳人蕪村

正岡 子規

意匠の美は文學の根本にして、人を感動せしむるに與つて力あり。然れども用語、句法の美これに伴なはざれば、可惜意匠の美を活動せしめざるのみならず、却つて厭ふべき俗氣を帯びたるが如く感ぜしむることあり。蕪村の用語と句法とは其の意匠を現すに最も適せるものにして、しかもその創造に係るもの多し。

「漢語」は蕪村の喜んで用ひたる所にして、種々の便利ありしに因るべけれど、その國語より簡短なりしに因らざればならず。複雑なる意匠を十數字の中に含めんには、眞に簡短なるものを用ふるの必要あり。

關に坐して遠き蛙を聞く夜かな

三井寺や日は午に逼る若楓

されど濫に漢語を用ひて、爲に一句の調和を缺かば佳句とは言難し。

國語もて言ひ得ざるにはあらねど、漢語を用ひて勢を強くしたる方、善く其の意匠を現すべき場合あり。

五月雨や大河を前に家二軒

絶頂の城たのもしき若葉かな

漢語を用ひていかめしくしたる句、

蚊遣してまゐらす僧の座右かな

賣卜先生木の下關の訪はれ顔

又支那の成語を用ひたるが爲に興あるもの、又成語を其の儘ならでは用ひるべからざるものあり。支那の人名地名を用ひ、支那の古事、風景等を詠ずる場合は勿論、我が國の事にも

正岡子規 名は常規、俳人・歌人。松山市の人。俳句和歌の革新に功あり。明治三十五年歿、年三十六。  
蕪村 谷口氏。攝津の人。姓を與謝とも稱せり。夜半亭・紫狐庵等の號あり。天明三年(四)歿、年六十七。蕪村の頃及びその當時の俳風を芭蕉頭のそれに比すれば、天明調は思想感情は複雑となり、細緻となり、且支那情調的・歴史的・古典趣味の繪畫的な趣味の加はれるを認め得るなり。

引合に出されたるもの少なからず。

易水に葱ながるゝ寒さかな

三徑の十歩に盡きて蓼の花

右の他に、

春水や四條五條の橋の下

の句の如く、春水の「橋の下」と同調なることを避けしものあり。

又、

薰風やともしたてかねつ巖島

の如く、「風薫る」といひては意強きに過ぎて句を成し難し。蓋

し蕪村の炯眼は早くもこゝに光れり。

「古語」も亦蕪村の好んで用ひたる所なり。漢語は延寶・天和

の間に、其角一派が用ひて終に其の調和を得ずして終りしも、

蕪村に至りて始めて成功を得たり。古語は元祿の頃、蕉門の

人々がその調和を試みて、已に成功したる所、今は蕪村に因りて更に一步を進めたり。

命婦より牡丹餅たばす彼岸かな

大高に君しろしめせ今年米

「俗語」の最俗なるものを用ひ始めたるも亦蕪村なり。元祿の頃は雅語・俗語相半ばせし俳句も、享保以後、無學無識の徒に翫弄せらるゝに至つて雅語漸くその姿を消し、俗語益用ひられ、意匠の野卑と相俟つて遂に俗俳となり了れり。されど其の俗語たるや、雅語を解せざるが爲に用ひたるものにして、それは俗語中の古に近きものなり。日常の話語に至りては固より用ひざりしのみならず、之を俗として排斥したり。檀林派の作者すら、なほこの俗語中の俗語を用ひたるものを見ず。然るに、之を使ひたる蕪村の句は、これが爲に俗に陥りしこと

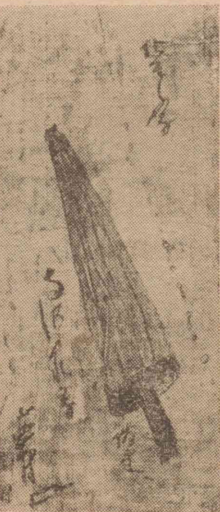
延寶 寶元天皇の年號。(三三三—三三六) 天和 同右。(三三六—三三九) 其角 榎本氏。芭蕉門下の俳人。後に

江戸派といふ一派を起せり。寶永四年(三三七)歿、年四十七。元祿時代 東山天皇の御代。(三三〇—三三三) 松尾芭蕉・近松門左衛門・井原西鶴等出て、平民文學の隆盛となりたる時代。享保 中御門天皇の年號。(三三三—三三六) 〆。

なく却つて腐草螢と化し、淤泥蓮を生ずるの趣あるを見ては、誰か其の伎倆に驚かざらん。

出る杭を打たうとしたりや柳かな  
化さうな傘かす寺の時雨かな

燕村は信屈なり易き漢語も信屈ならしめざりき。冗漫なり易き古語も冗漫ならしめざりき。野卑なり易き



燕村筆蹟

俗語も野卑ならしめざりき。實に燕村は用語に於ても獨歩の人なり。

俳句の句法は貞享・元祿に定まりて、享保寶曆を経て少しも動かず。たゞ時に檀林派及び鬼貫等の奇を弄するあるのみ。然るに燕村は句法の上に種々の工夫を試み、或は漢詩的に、或

貞享 靈元天皇の御代(三三〇—三三三)  
寶曆 桃園天皇の御代(四二二—四二四)

燕村筆蹟

化さうな傘かす寺の時雨かな  
燕村

檀林派 西山宗因の創めし俳諧の一派にて、滑稽を旨とする。

白露や無分別なる  
置所 宗因  
浮世の月見過しに  
けり末二年 西鶴

は古文的に、先人の未だ口にせざりし所を吟ぜり。

春風や堤長うして家遠し

菜の花や月は東に日は西に

しの、めや鶉をのがれたる魚淺し

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音暗し

の如きは、漢詩漢文より來りし句法なり。

陽炎や名も知らぬ蟲の白き飛び

橋なくて日暮れんとする春の水

春の水背戸に田つくらんとぞ思ふ

の如きは、古文和歌より來りしもの。又その他に、

蚊の聲す忍冬の花散るたびに

水かれく、蓼かあらぬか蕎麥か否か

の如きあり。

發の細腰よりぞこぼれ梅 才磨  
わがれたる首あげて見る寒さかな 來山

鬼貫 平泉氏。又、上島氏。名は治房。

攝津國伊丹の人。元文三年(三三〇)歿、年七十八。

行水のすて所なし 蟲の聲

此れ小判をたてた一晩あてとらん

こころ

こころ

こころ

こころ

こころ

こころ

こころ



道三は一度に動く  
田植屋

修飾語は句を活動せしめ、かつ印象を明瞭ならしむるに效多し。蕪村は巧みに之を用ひて、少しも句勢にたるみを生ぜず。殊に中七音の中にこれを用ふることに長じたり。

手燭して善き蒲團出す夜寒かな

眞結びの足袋はしたなき給仕かな

蕪村の句は堅く締りて揺がぬが其の特色なり。故に簡勁の語多く、冗漫の語少なし。然るに彼に一つの癖あり。

つゝ、じ咲きて石うつしたる嬉しさよ

顔白き子のうれしさよ枕蚊帳

五月雨の大井越えたるかしこさよ

の如き是なり。「さよ」といはずば感情を現す能はざる時にのみ用ひたる蕪村の句は、固より此の語を無造作に置きたるにあらず。更に驚くべきは蕪村が一句の結尾に「に」といふ手爾

蕪村の祖  
松尾芭蕉  
真門ノ祖  
松永貞徳  
護林流ノ祖  
西山宗因

葉を用ひたる事なり。

畑打や鳥さへ鳴かぬ山陰に

時鳥平安城をすぢかひに

廣庭の牡丹や天の一方に

庵の月あるじを問へば芋掘りに

狐火や燭燵に雨のたまる夜に

常人をして此の句法に倣はしめば必ずや失敗に終らん。助辭の結尾を以て一句を操るもの蕪村の蕪村たる所以なり。

蓋し蕪村は複雑なる意匠を短詩形に盛るには、含蓄多き漢語を常用し、或は古語を用ひ、或は俗語をも驅りて以て敘事詩形を精細にすることを痛感せしを以てなり。宜なり、その句の趣味識ひろく、詩的寫象の複雑精緻に、その調の緊縮して勁健味の多きことは。

健味の多きことは。

(俳人 蕪村)

手爾葉 助辭。

# 一〇 雅文六篇

書

中島 廣 足

夏の日の暮難きをも知らず、冬の夜の長きをも覚えぬは、ふみ見る心の樂しさになんありける。さるは道々しき筋のはさらなり、家々にしるせる何くれのふみ、またかりそめの筆すさびなど、唐やまと、古今と、いとさま／＼多かる中に、わがたてたる筋ならぬも、見もてゆくまゝには、えうある事どもありて、かにかくに飽かず面白く樂しきは、ふみにしく物またなかりけり。遠き世のを見る程は、われもその世にある心地して、やがてその人々を友となしてうち語らふ心地さへせらるゝを、われも筆とりて、よしなし事ども書きつくるが、たま／＼も散りぼひ残りて後の世に傳はらば、今の昔を見るが如く、後の人

中島廣足 通稱太郎。號は樞園。江戸時代の國學者・歌人。熊本の人。元治元年（三五四）歿、年七十三。樞園文集・東海日記・瓊浦集等の著がある。

人はたわれを友とせんと思へば、千歳の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなん覺ゆる。萬づの心やるわざいとさはなれど、たゞひとりゐて飽かず樂しきは、ふみの外にまた何かはあらん。「あるが上にもあらまほしきはふみなりけり。」と、鈴屋翁の言はれたるは、げにさる事にこそ。

春 雨

中島 廣 足

萱ふける軒は雨の音しづかにて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翹しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたゝきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。（樞園文集）

風 鈴

香川 景 樹

香川景樹 號は桂園。江戸時代の歌人。

月の晴れわたり、花の散行くとき、を告ぐる、いと哀れなり。かの入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日か、げろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめきいでし夕暮に聲あはせたる、物にも似ず。(かるかや集)

きぬた

清水 濱 臣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。かりがねのきぬたをさそふにやあらん。きぬたの音のかりがねに通ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもこの音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つをりの憂き故か。皆あらず。聞く人の心の寂しきなり。

(泊酒舍文集)

冬のころ

伴 蒿 蹊

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がくれ、木の芽春雨も

因幡の人。京都に住めり。天保十四年(五)歿、年七十六。

清水濱臣 藤原氏。號は泊酒舍。江戸時代の國學者・醫者。江戸の人。文政七年(四)歿、年四十九。

伴 蒿 蹊 名は資芳。號は閑田子。江戸時代の國學者。

時雨にかはり、それもいつしか染めぬべき物なくなりぬれば、みぞれに移りて雪とつもる。一歳の月日はひま行く駒の程もなきかな。振分髪のうなる子が大人しくなりぬと言はれしなん、やがて老のはじめにて、終にひげ髪の白くなりぬるを、しもつくくと、思ひ比べて、埋火の許にのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし。「少壯いくばく時ぞ、老をいかん。」と詩にも聞ゆるを徒らに朽果てぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを、後の車の戒てふ事もあり。我にな倣ひ給ひそよ。冬は歳の餘りとも言ふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね、給ひそと言はまほし。老いては益壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。たゞ寒きにたへねば、ひたやごもりにこもる程に、ねぶりは宵より兆して、しかも夜深くは目覺めぬ。冬

近江の人。文化三年(四)歿、年七十四。

少壯いくばく云々 「少壯幾時兮、奈何。」漢の武帝、「秋風辭」の詩句

老いては益云々 「少有大志、嘗謂賓客曰、丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯。」(後漢書、馬援傳)

も憂し。老も憂し。こは老の心をうつすとや言はん。冬  
心をうつすとや言はん。 (閑田文章)

楠正成

楠 曙 覽

湊河なる楠正成朝臣の墓石の文字を摺りとりたるを傳へ  
受けてもてる人のあるをりく見かく。天地を貫くかの朝  
臣の忠ごころは年月ふるまゝに光そはりてやんごとなき物  
なるより、心ある心無きわかちなく、此の摺もじを貴とみま  
つるならばしとなりたる。さはいへど人々蓄へもたる大和  
心の芽、かつくはり出づる春や來にけむと、年ごろしかめら  
れし眉根少しはうちのばされて、

年々に御墓の文字をすりふやし寫しひるむる

君の真心

(志濃夫廼舎歌集)

楠 曙 覽 初名尙事。  
明治元年(三〇)歿、  
年五十七。

## 二 物語論

本居 宣 長

中むかしのほど、物語といひて、一くさりの書あり。物語と  
は、今の世に「はなし」といふことにて、すなはち昔話なり。日本  
紀に「談」といふ文字をぞ「ものがたり」と訓みたる。

そを書に名づけて作れることは、繪合の卷に「物語のいでき  
はじめのおやなる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合せて」とあれ  
ば、この竹取やはじめなりけむ。その物語、たがいつの代につ  
くれりとは、さだかにはしられねども、いたくふるき物とも見  
えず、延喜などよりはこなたの物とぞ見えたる。そのほかの  
たぐひなる古物語ども、この源氏よりさきにも、かずく多く  
ありしと聞えて、その名どもあまたきこえたれど、後の世には  
傳はらぬぞ多かめる。又同じころ、それより後のものも多く

本居宣長 國學者。

鈴の屋と號す。紀  
州侯に仕ふ。享和  
元年(四六)歿、年  
七十二。

繪合の卷 源氏物語

繪合の卷。

竹取の翁 竹取物語  
にある讚岐造慶と  
いふ翁。竹取物語  
は我が國最古の小  
説。

宇津保の俊蔭 宇津

保物語は二十卷。

作者不詳。俊蔭は  
主人公仲忠の祖父。  
延喜 醍醐天皇の御  
代の年號。(五二一  
一五二)。

源氏 源氏物語。五  
十四卷。紫式部の  
作。

して、今の世にもこれかれとあまたのこれり。榮華物語の煙の後の卷に、「物語あはせとて、今あたらしく作りて、左右かたわきて、廿人合せなどせさせ給ひて、いとをかしかりけり。」といへるを見れば、そのころもおほく作りたりしなり。

さてもろくの物語のさま、おのくすこしづつかはりてさまなれども、いづれも昔の世に有りし事をかたるよしにて、あるはいさゝかかたち有りし事をよりどころにして、つくりかへても書き、あるはその名をかくしもし、かへもして書き、あるはみながら作りもし、又まれには有りしことをそのまゝに書けるもありて、やうくなる中に、まづ多くはつくりたるものなり。

さてそはいかなる趣なる物にて、何のためによむものぞといふに、大かた物がたりは、世の中に有りとおあるよき事あしき

榮華物語 四十卷。  
世継物語ともいふ。  
關白道長の盛世を  
寫すを主眼とした  
る歴史物語。作者  
不詳。  
煙の後の卷 第三十  
七卷。

事、めづらしき事をかしき事、おもしろき事あはれなる事などのさまを、書きあらはして、そのさまを繪にもかきまじへなどして、つれづれなるほどのもてあそびにし、又は心のむすぼはれて物おもしろきをりなどのなぐさめにもし、世の中のあるやうをも心得て、ものあはれをもしるものなり。

こゝらの物語書どもの中に、この物がたりはことにすぐれてめでたきものにして、大かた、さきにも後にもたぐひなし。まづこれよりさきなるふる物語どもは、何事も、さしも深く心をいれて書けりとしも見えず。たゞ一わたりにて、あるはめづらかに興ある事をむねとし、おどろくしきさまの事多くなどして、いづれも、いづれも物のあはれなるすぢなどは、さしもこまやかにふかくはあらず。又これより後の物語どもは、さごろもなどは何事もはらこの物がたりの様をならひて、

この物がたり 源氏物語。

さごろも 狭衣物語。

心をいれたりとは見ゆるものから、こよなくおとれり。その外もみなことなることなし。

たゞ此の物語ぞこよなくて、殊に深くよろづに心をいれて書ける物にして、すべての文詞のめでたきことは更にもいはず、よにふる人のたゞずまひ、春夏秋冬をりくくの空のけしき、本草のありさまなどまで、すべて書きざまめでたき中にも、男女、その人々のけはひ心ばせを、おのくことくくに書き分けて、ほめたるさまなども、皆その人その人のけはひ心ばへにしたがひてひとやうならず、よく分れて、うつゝの人にあひ見るごとくおしはかるゝなど、おぼろげの筆の、かけても及ぶべき様にあらず。

さて又よろづよりもめでたきことは、まづからぶみなどは、よにすぐれたりといふも、世の人の事、にふれて思ふ心の有りさまを書けることは、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく浅きものなり。すべて人の心といふものは、からぶみに書けるごと、ひとかたにつきぎりなる物にはあらず。深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくしくめ、しくみだれあひてさだまりがたく、さまぐくのくまおほかる物なるを、この物語には、さるくだくしくくまぐまでのこるかたなく、いとくはしくこまかに書きあらはしたること、曇りなき鏡にうつしてむかひたらむがごとくにて、大かた人の情のあるやうを書けるさまは、やまともろこし、いにしへ、今、ゆくさきにも、たぐふべき書は、あらじとぞおぼゆる。

又すべて卷々の中に、めづらしくおどろくしく、めさむるやうの事は、さくなく、はじめよりを、はりまで、たゞよのつねのなだらかなる事の、同じやうなるすぢを、のみいひて、い

四卷。大貳三位藤原賢子(紫式部の女)の作と傳ふ。

と長き書なれども、よむにうるさくおぼゆることなく、うむこ  
 とはなくて、たゞつゞきゆかしくのみぞおぼゆるかし。おの  
 れをしへ子どものために、はやくよりこの物語を讀み説きて  
 聞かすること、あまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、か  
 ばかり長からぬだに、説くに倦む心もまじるを、これはさしも  
 長き書にて、年月をわたれども、いさゝかも倦む心いでこず、た  
 びごとに、はじめて讀みたらむこゝちして、めづらしくをかし  
 くのみおぼゆるにも、いみじくすぐれたるほどはしられて、か  
 へすがへすめでたくなむ。

(源氏物語、玉の小櫛)

そのかみのこゝろたづねてみだれたるすぢと

さわくる玉のをぐしぞ

(本居宣長)

三一 一茶文抄

小林 一茶

あらが春

昔、丹後の國普甲寺といふ處に、深く淨土を願ふ上人ありけ  
 り。年の始は世間、祝をしてさゞめけば、我もせむとて、大晦日  
 の夜、一人使ふ小法師に手紙認め渡して翌の曉にしかたせ  
 よといひ教へて、本堂に泊りにやりぬ。小法師は、元日の旦、未  
 だ隅々は小暗きに、初鶏の聲と同じくがばと起きて、教の如く  
 表門を丁々と叩けば、内より「いづこより。」と問ふ時、西方彌陀  
 佛より年始の使僧に候。」と答ふるより早く、上人裸足にて、踊  
 り出で門の扉を左右へさつと開き、小法師を上座に請じて、昨  
 日の手紙をとりて、恭しく戴きて讀みて曰く、「それ世界は衆苦  
 充滿に候間、早くわが國に來るべし。聖衆出迎ひして待入り

小林一茶 信濃の俳人。通稱彌太郎。俳諧寺と號す。寶曆十三年(四三)柏原に生まる。幼にして母を失ひ、繼母の爲に家を闘ぐ能はずして江戸に住むこと十餘年。身を俳諧に委ぬ。性偏僻、王侯貴顯と雖も屈せず、文政十年(四七)歿、年六十五。滑稽諷刺の句を以て稱せらる。

普甲寺 昔、京都府與謝郡の普甲山にありしといふ寺。

聖衆 極樂に在る諸菩薩をいふ。念佛行者の臨終には、阿彌陀佛がこれ等の聖衆を遣はして極樂國土に迎へ入るといふ。

候。」と讀み終りて、おう／＼と泣かれけるとかや。

この上人自ら企み拵へたる悲しみに、自ら歎きつゝ、初春の淨衣を搾りて、滴る涙を見て祝ふとは、物に狂へるやうながら、俗人に對して無常を演ぶるを禮とすと聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。それとは聊か替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜に比へての祝ひ盡くしも、厄拂の口上めきて、空々しく思へば、から風の吹けば飛ぶ屑家は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになむ迎へける。

めでたさも中位なりおらが春

としかるも貴男まはせの年の暮

こぞの夏竹植うる日のころ、うきふししげき浮世に生まれたる娘、ものにさとかれと、名を「さと」とよぶ。ことし、誕生日祝

竹植うる日 陰曆五月十三日。この日竹を植うれば、よく繁茂すといふ。竹酔日。

ふころほひより、てうち／＼あは、天窓てん／＼、かぶり／＼振りながら、同じき子ども風車といふ物もてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがて、むしやむしやしやぶつて捨て、露ほどの執念なく、直ちに外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめり／＼むしるに、「よくした、よくした。」とほむれば、誠と思ひ、げら／＼と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら／＼しく清く見ゆれば、なかなか心の皺を伸ばしぬ。又、人の來りて、「わん／＼はどこに。」と言へば、犬に指さし、「かあ／＼は。」と問へば、鳥に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしく覺ゆ。

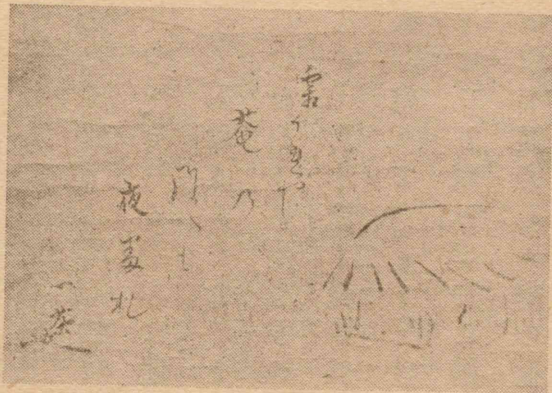
折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のす



れば直ちに物投げすてて、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ、手眞似して、うれしげなるを見るにつけ、何時しか、かれをも振分髪のたけになして、踊らせた  
らむには、二十五菩薩の管絃よりも遙かにまさりて、興あるわざならむと、わが身に積る老を忘れて、憂さをなむ晴らしける。

かく日ねもす、をじかの角の束の間も、手足を動かさずといふことなくて、遊び勞るればにや、朝は日のたくるまで眠る。

そのうちばかり、母は飯炊ぎ、そこら掃き片づけて、やがて閨に泣聲のするを、目の覺むる相圖と定め、手かしこくも抱起して、



一茶筆蹟

二十五菩薩 阿彌陀佛の左右に侍する二十五の菩薩。

一茶筆蹟  
霜かれや  
座の  
門へも  
夜番札

一茶

乳房あてがへば、すはくと吸ひながら、胸板の邊を打叩きて、にこ／＼笑ひ顔を作るに、母は、長き胎内の苦しみも、日々の襦袢の穢はしきも打忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに、撫でさすりて、一人悦ぶなりけり。

蚤のあとかぞへながらに添寝かな

みとり日記

六日。天晴れたれば、臥してばかりも退屈にや思しめさんと、夜著うち疊みて寄り懸らせ申したるに、來し方の物語など始め給ひけり。「抑、汝は三歳の時母に後れや、長くるにつけても、後の母との中睦まじからず。爲に日々夜々魂を痛め、心の安き時とはなかりき。ふと思ひけるやうは、一緒にありなばいつまでもかくありなん、一度故郷を離れたらんには、自然親慕はしき事もやあらんと、十四歳といふ春はる／＼江戸

衣のうらの玉 法華經に出づ。或人友に賣珠を衣裡に入

れおかれしを知らず、踏圖を流浪して貧苦に歎む。後前の友に邂逅して衣裡に賣珠の藏めあるを聞き、忽ち貧苦を免るゝを得たりといふ故事。  
六日 享和元年(云云)五月。一茶時に年三十九。物語など始む。一茶の父が物語るなり。父は柏原にて農を業とす。名は彌五兵衛。

へとは赴かせたりき。あはれ餘所の親は、今三とせ四とせ過ぎたらんには、家を任せ、汝にも安堵せさせ、我等も行末を樂しむべきに、年はもゆかぬ瘦骨に荒奉公せさせしを、つれなき親とも思ひしならん。皆これ宿世の因縁と諦めよや。我も一たびは江戸に立越えて汝にめぐり逢ひ、相果てんにも汝が手を借らんと思ひしに、この度はるく、と歸り來れる汝に、かゝる看病を受くるこそ淺からざる縁なれ。今は往生遂げたりとも何の悔かあらん。」とはらく、と涙を落し給ふに、我は唯うち伏して物をもえいはず。夏も消えやらぬ富士の雪より厚く、紅の色より深き父の恩を、側に附添ふこともならで、唯浮かめる雲の如く、東にあるかと思へば西に漂ひて、はや今年にて二十五年にもなりぬ。頭は白き霜を戴くまで親の側を遠ざかりぬること、五逆罪といふともこれに過ぎなんやと、心に

五逆罪 佛經に「殺

伏拜み、われ涙を落しなば、病いよく、重らせ給ふべしと、顔おし拭ひてうち笑ひ、さること、心に思ひ給はで、はや、快氣なし給へ。」と藥をすゝめ、やがて健かになり給はば、我も元の彌太郎となり、草刈り土掘りて御心を安んじ參らすべし。今までの體たらく、許させ給へ。」といへば、父は限りなく喜び給ひぬ。

父、殺レ母、殺レ阿羅漢、破レ和合僧、出レ佛身血、ことあるをいへり。

八日晴。田休みなればとて、所縁あるも所縁なきも、聞傳へ語り傳へて、訪ひ來る人も多かり。父が好物なりとて、酒もて來る人もあり、蕎麥粉もて來るもあり。父は喜ばしげに首を擡げ、手を合はせて、ほどく、に會釋し給ひぬ。「身後黄金北斗をさゝふとも、如かじ生前一杯の酒。」と、唐も大和も人の情等しく、亡き後にて佛事供養美々しく盡くしたらんより、存命のうち、の優しき言葉には増さらじ。今は世降りて、他の一寸の

身後云々 白氏文集に「身後推レ黄金柱」北斗。不知生前一杯酒。

歪は咎めて、おのれが一尺のひがみは見えず、萬づうしるめた  
き勝にて、我が身不孝なりと思へる人だになし。

うけがたき人と生まれてなよ竹のすぐなる道  
に入るよしもがな

この夜は子一つの頃より寐られねば、夜長うおぼして、まだ  
夜は明けぬか、雞の啼かざるか。」と、我に聞き給ふこと三度、四  
度、七度、九度に及べども、たゞ星あかりのみにして、軒のつまの  
縦楓の樹かけ、其處に彼處に暗く、梟の夜更をうたふばかりな  
り。あはれ鶏の空音をつくりて、關の戸を開きためしはあ  
れど、火を袋に入る、幻術は知らず、入日を返す勢はたあらね  
ば、たゞ燈火をかゝげ、寝顔を守りて、空しく天明を待つばかり  
なり。

十日晴 顔りに梨の實をたうべたしとむづかり給へば、こ

のあたりの所縁あるも無きも、親しき限り、富みたる家、心當り  
ある門、聞き盡くし尋ね探し盡くすといへども、一つだに貯へ  
たる人とてなく、夏さへ寂しき山里なり。今日はわけて宣ふ  
なれば、善光寺へ往きてみると、曉に支度して門を出でけるに、  
阜月の空ほのく、晴れて、白雪はた山にあり。青葉隠れの花  
は春を殘して、種蒔の山入など懐かしく、時鳥の一聲もこよな  
く時めく空なるに、あやしく心の晴れぬ曙なりけり。卯の下  
刻、牟禮といふ驛に至る。今は二十四年の昔、われ江戸へ赴き  
ける日、父の見送り給ひし里なれば、川の音、阪の影も仄かに心  
覚えありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顔のみとなりけ  
り。急ぎければ、辰の刻ばかりに善光寺に著く。醫師の家は  
まだ朝飯頃と見えて、主人の聲も聞えければ、具さに病のさま  
を語りけるに、やがてから櫛の匙取りつゝ、御薬合はせて給ひ

子一つ 夜の十二時頃。

鶏の空音 史記孟嘗君傳に、昭王釋孟嘗君、出至函谷關、關法鶏鳴出客、客有爲鶏鳴者、客悉鳴於是、開關出之。入日を返す勢 淮南子に、魯陽公與韓構、難、戰酣方暮、援戈而提之、日爲反三舍。

善光寺 今の長野市に名刹善光寺あり。拍原より約三一軒。

種蒔の山入 離れたる山に小屋掛などして、農事にいそしむなり。

卯の下刻 今の午前七時頃。牟禮 上水内郡中郷村大字牟禮。

辰の刻 今の午前八時頃。

たり。そもくこの地は御佛の淨土にしあれば肆は軒をあらそひ、幌は風にひるがへり、入る人出づる人、國々よりはるる歩を運びて、未來の成佛を願はぬ人なし。おのれは今日父の命を受けて、御薬づかひはた梨さがしに來つるなれば、この役濟まざらんうちとはと、御佛も遙拜して、天を翔り地を潛りてなりとも、梨一つ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を、足を空にして驅けめぐるに、悲しきは、さらに片割一つありといふ人もなし。昔雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、皇天我を捨て給ふかや、佛神我を見限り給ふかや、一世ばかりの不孝にはあらじ、父はさぞ梨を待ち居給はん、この儘に歸りて父を何とか慰めんと思へば、胸塞がりて、落つる涙は大道を潤すに、往來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、暫く手を組み首をうなだれて、心をぞ靜めける。無き物はいか

雪中に筍を掘り 吳志に、「孟宗母嗜<sub>レ</sub>筍、冬節將<sub>レ</sub>至、竹尚<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>生、宗入<sub>ニ</sub>竹林、哀歎、而筍爲<sub>レ</sub>之出、以供<sub>レ</sub>母。」  
氷上に魚を求め 晉書に、王祥性至孝、繼母朱氏不<sub>レ</sub>慈、而祥愈恭謹、父母疾、衣不解<sub>レ</sub>帶、湯藥必親嘗、母嘗欲<sub>レ</sub>生魚、時天寒、冰凍、將<sub>レ</sub>剖<sub>レ</sub>氷求<sub>レ</sub>之、冰忽自解、雙鯉躍出。

にせん。唯一足も早く戻りて、薬を進め奉らんと、手を空しうして吉田といふ里に來つるに、樹立の山鴉三つ四つ、我を見ては聲をたつるに、何となく父の身の上の心にかゝり、息もつきあへず足を早むる程に、日影は八つ時といふ頃宿に戻る。父はいつもより顔うるはしく笑みを含み給ふに、梨の事を語らば、又もや氣を落し給はん、とやせんかくやせんとためらふに、父の間ひ聞き給へば、ありのまゝを答へ、高田に往きて求め來り参らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根無し言を申して父を宥め奉りぬるは、いと本意なき夕なりけり。(よらが春)

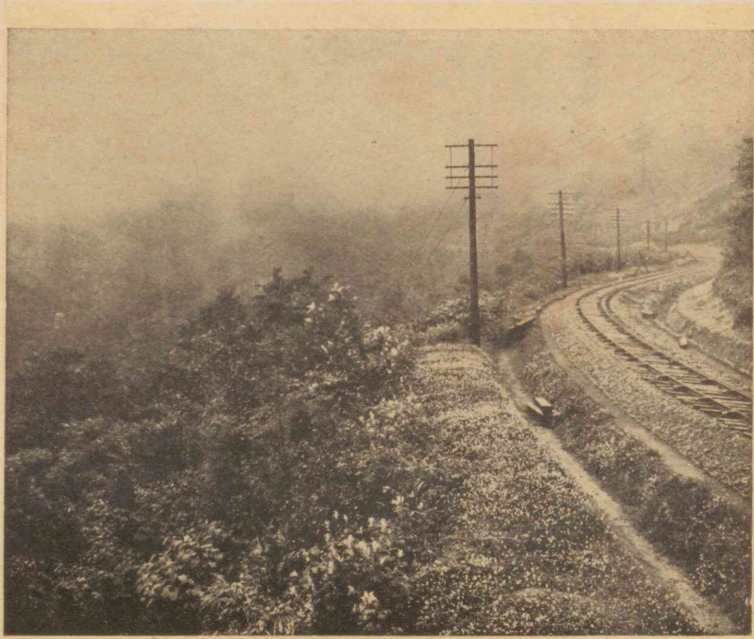
吉田 上水内郡吉田村。現在は長野市に屬す。  
八つ 午後二時頃。  
高田 今の新潟縣高田市。栢原より約八十軒。

一三 汽車に乗りて

上田 敏

赤松の林をあとに、  
麻島ひだりに見つゝ、  
汽車はいま堤にかゝる。  
ほのかなる水のほひに、  
河淀の近きは著し。

三稜草生ふる河原に  
葦切はけしと噪ぎ、  
鶺鴒こそ夏は來らね、  
たま〜に百舌の速賢  
鶺鴒の何をか思ふ



赤松の林を  
とあ

上田 敏 號は柳村。  
英文學者・詩人。  
文學博士。東京の  
人。東京高等師範  
學校・京都帝國大  
學教授たりき。大  
正五年歿、年四十  
三。

三稜草 水邊に生ず  
る多年生の草。葉  
は細長く、莖は約  
一米に達し、夏秋  
の候、葉間に三稜  
形の莖を生ず。花  
は白色。  
鶺鴒 はくてもうの異名。  
百舌の速賢 百舌が  
夏の頭蛙・小鳥な  
どを捕へ、木の枝  
に貫きおかないよ。

しよんぼりと立てる暇に、  
 紡績の宿にやあらむ、  
 きり、はたり、はたり、ちやう、ちやう、  
 箴の音や、にへだたり、  
 道祖神祭るあたりの  
 鐵道の踏切近く、  
 繩帶の檻褸の衣、  
 褐色は飾磨の染の  
 乳呑子を負へる少女は  
 淺茅生の末黒に立ちて  
 萬歳と囃し送りぬ。  
 萬歳はなれにこそあれ、

籠鷲 涉禽類の一種。  
 形は通常の鷲の如く、冠毛は無し。嘴の長さ約十五糎、嘴端は廣くして籠の如し。羽毛は暗灰色。

道祖神 路上の惡魔を防ぎて行人を守る神。みちのかみ。手向の神。

飾磨の染 播磨國飾磨郡印南より出す染色。紺の濃きもの。

淺茅生 茅のまばらに生えたるところ。末黒 春の燒野の芒の葉先の黒きこと。こゝは淺茅生の末黒とつけて見る。

幾年を生きよ、里の子。  
 人の世に尊きものは  
 土の香ぞ、國の御魂ぞ。  
 偽の市に住まへば  
 産土の神に離りて  
 養を缺きたる人も、  
 埴安の郷の土より  
 生えぬきのなれに呼ばれて  
 本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、  
 農人の寢覺に通ふ  
 微かなる土のおとづれ、

なつかしき母の聲音か。  
 晝さがり草の香高く  
 松脂のにはひもまじる  
 地の胸の乳房のかをり  
 蘇門答刺の香も及ばじ。  
 忽ちに鐵のにはひす。  
 鳴神の落ちかゝること  
 汽車は今、橋に轟く  
 桁構へ眼路をかぎりて、  
 ひとり見る蛇籠の磔。

埴安 埴安は、もと  
 地名なるも、こゝ  
 にては殆ど枕詞の  
 如く用ひられたり。  
 本然の命 人間の  
 性として持つ、何  
 の偽も飾もなきあ  
 りの儘の生命。

蘇門答刺 七種の香  
 木の一。

### 一四 春を待ちつゝ

島崎 藤村

島崎藤村 詩人・小説家。名は春樹。明治五年生。

フランスの旅にある頃、私はパリの客舎に身を置いて、遠く自分の國を振返つて見るやうな靜かな時を見つけることがよくあつた。わが國における十九世紀といふものに興味を持ち始めたのも、あの旅であつた。

もしわが國における十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があつたら、いかに自分はそれを讀むのを樂しむだらう。明治時代とか、徳川時代とかの區劃はよくされるが、過去つた一世紀を纏めて考へて見ると、そこに別様の趣が生じて來る。まづ本居宣長の死あたりからその時代の研究を讀みたい。萬葉の研究、古代詩歌の精神の復活、國語に對する愛情と尊重の念、それらのものがいかにばかり當時に目ざめ

て來た國民的意識の基礎となつたかを讀みたい。一方には、あの時代の初において、喜多川歌麿も歿し、皆川淇園も歿し、上田秋成も歿し、十八世紀風の特殊な藝術が、次第に式亭三馬とか、十返舎一九とか、爲永春水とか、或は歌川派の畫家の群とかの寫實的傾向に變つて行つたことを讀みたい。一方には聖堂を學問の中心として、文藝趣味、道德の上に支那の憧憬があるとせば、一方には蘭學の研究などが非常な勢で起つてゐる十九世紀の初期を考へると、新舊のものが雜然同棲してゐる。それを委しく讀んで見たい。組織的な西洋の文物を受け入れようとしてから、まだ漸く五六十年だ。兎も角もその短期の間に今日の新しい日本を仕上げたといふ人もあるが、それは餘り卑下した考へ方と思ふ。少なくとも百年以前の前半期をその準備の時代であつたと見なければなるまい。前野

喜多川歌麿 浮世繪の大家。文化二年(興亡)歿、年五十三。

皆川淇園 儒者・畫家。名は鳳。文化四年(興亡)歿、年七十四。

上田秋成 國學者。和歌・文章をよくす。文化七年(興亡)歿、年七十八。

式亭三馬 小説家。通稱四宮太助。文政五年(興亡)歿、年四十八。

十返舎一九 小説家。本名は重田貞一。天保二年(興亡)歿、年五十七。

爲永春水 小説家。佐々木氏。通稱越前屋長次郎。天保十三年(興亡)歿、年五十四。

前野良澤 醫師・蘭



良澤とか、桂川甫周とか、杉田玄白とか、大槻玄幹とか、その他足立左内、高橋作左衛門、伊藤圭介、足立長雋、あゝいふ人達が、來るべき時代の爲に地ならしをしていつた跡を委しく讀んで見たい。頼山陽もあの時代には見のがせない代表的の人物であつたらう。あの人の書いたものは随分混りけの多いものとしても、一代の人心を引付けたことは争はれまい。けれども、山陽にはまだ餘程十八世紀風の残つた所がある。渡邊華山、高野長英、吉田松陰等になつてくると、何となくそこに武士的新人の型を見る。その情熱においてはより熱烈であり、その思想においてはより實行的であり、その學問においてはより新しいものとなつて來てゐる。反抗憤怒悲壯な犠牲精神、あの人達の性格を考へると、どうしても十九世紀でなければ見られないやうな激しい動搖と、神經質と、新時代の色彩を帶

學者。中津藩に仕奉る。享和三年(一八一三)歿。年八十一。  
 桂川甫周 醫師。蘭學者。幕府に仕奉る。文化六年(一八二九)歿。年五十九。  
 杉田玄白 醫師。蘭學者。文化十四年(一八二七)歿。年八十五。  
 大槻玄幹 醫師。仙臺藩に仕奉る。又幕府の圖書和解御用。天保八年(一八三七)歿。年五十二。  
 足立左内 大阪鐵砲組同心。  
 高橋作左衛門 東阿と號す。大阪御定番同心。曆學。地理學。精し。文政十二年(一八〇〇)歿。年四十六。  
 伊藤圭介 尾張藩の醫師。植物學の大東家。理學博士。男爵。東京帝國大學名譽教授。明治三年(一八七〇)歿。年九十九。  
 足立長雋 醫師。蘭學者。天保七年(一八三六)歿。年六十一。  
 頼山陽 歴史家。字

びたものがある。そんなことなどが詳しく書いてあつて、それを讀むことが出來たらばと思ふ。わが國の十九世紀は、舊いものが次第に廢れていつて新しいものがまだ眞實に生まれなかつたやうな時だ。すべてのものが統一を欲して叫びをあげてゐたやうな時だ。その中で士族といふ一大階級が滅落していつた。幾何の悲劇がそこに醸されたらう。それを讀んで見たい。長谷川二葉亭、山田美妙齋などの始めた言文一致の仕事を國語の統一といふ上から論じたのも讀みたい。新しい詩歌が僅かに頭を擡げたのも漸く十九世紀の末のことである。

異郷の旅に萌した私の心持は、歸國の後も、長く變らずにあつた。前世紀とは言つても、あの時代に起つて來てゐることは、皆私達に直接關係の深いもののみである。或意味からい

は子成、通稱久太郎。天保三年(一八三二)歿。年五十三。  
 渡邊華山 畫家。蘭學者。名は定靜。字は伯登。又字安。通稱華山。華山と號し。後華山と改む。三河の人。田原藩士。天保十二年(一八四一)歿。年四十九。  
 高野長英 本姓後藤氏。蘭醫。嘉永三年(一八三〇)歿。年四十七。  
 吉田松陰 萩の藩士。名は矩方、通稱貞次郎。幕府の志士。安政六年(一八五九)歿。年二十九。  
 長谷川二葉亭 小説家。名は辰之助。天明治四十六年(一八四六)歿。年四十六。  
 山田美妙齋 小説家。名は武太郎。硯友社同人。二葉亭と號す。共同言文一致運動の功あり。年四十四。三十三年歿。年四十四。

へば、私達はそこから出發してゐる。あの暗い時代をもつと探つて見るといふのは、今日の私達に取つても興味の深いことではなからうか。

ゴンクウルには日本の浮世繪に關した名著がある。あゝいふ著述が單なる異國趣味でなしに、十八世紀の藝術に寄せた深い興味から作られたといふのは、面白い事だと思ふ。もし我が國の十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があるなら、過ぐる二つの世紀の間の藝術の比較だけでももつと私達の目をあけてくれることが多からうと思ふ。あの歌麿などが、あれほどデカタンの傾向のあつた人にもかゝらず、あの畫にあらはれて居る線や色彩から私達の受取る感じは、あの熟し切つたやうな男女の形態や髪や口脣なぞから私達の受取る感じは、十八世紀でなければ見られないもの

ゴンクウル フラン  
スの小説家。(1822  
—1896)。

デカタン 衰亡墮落  
と譯す。

といふ氣もする。十九世紀の藝術となると、もつと神経質なものがあるやうな氣がする。さういふ比較を讀んで見たい。私達が北齋の畫に見つけるグロテスクの美とも言ひたいものは、一茶の俳句や南北の脚本に見つけるものと、何處か共通したやうな性質のものであるか、奈何か。さういふことも讀んで見たい。過去の藝術が靜的な物の表現であるといふことは、よく私達の教へられる所である。さういふ判斷に従へば、北齋の畫に現れて居るやうな動きを、あのムーヴマンをどう見たらいいのだらう。江戸時代の藝術家が概して淡泊であり、酒脱であるといふことも、よく私達の教へられる所である。その見方に従へば、小説作者としての馬琴、畫家としての北齋、戲曲家としての南北、詩人としての一茶、あの人達に見るやうな執拗と濃情とをどう考へたらいいのだらう。さういふ

北齋 葛飾氏。名は

爲一。浮世繪師。

嘉永二年(三三)没、

年九十。

グロテスク 奇異。

一茶 小林氏。俳人。

通稱彌太郎。信濃

の人。文政十年(二

四)没、年六十五。

南北 鶴屋氏。劇作

家。文政十二年(二

四)没、年七十五。

ムーヴマン 佛語音。

運動。動向。

ムーヴマン 佛語音。

運動。動向。

馬琴 瀧澤氏。別號

曲亭馬琴。小説家。

嘉永元年(二五)没、

年八十二。

ことも精しく讀んで見たい。

文學の上から考へて見ても、私達は三馬や一九などの書いたものを、一概に軽く見る先入主な考へ方に捉へられて、はつきりした特色も掴めない。或は前世紀の初期の特色は、南北の戯曲などの方に色濃く現れてゐるやうにも思へる。詩人としての一茶は確に十九世紀初期の人で、その自我を高調したといふ點から見ても、人間の煩惱を憚らずに歌ひ出したといふ點から見ても、あの蕪村なぞに比べて遙かに近代的であると言へよう。私達は前世紀の初の詩歌を見渡して、桂園派の諸歌人の歌よりも、千蔭の流を汲む人達のそれよりも、一茶の俳句の方により多く時代の特色を見得るやうな氣もする。しかし、かういふことは、今俄に言つて了へるものでもない。景樹の歌の中にも、かなり私達の心持に近いものがある。さ

桂園派 香川景樹の歌風を繼ぐもの。  
千蔭 加藤氏。歌人。國學者。文化五年(一八六〇)歿、年七十四。

ういふことが精しく書いてあつて、それを讀むことが出來たらばと思ふ。

若し、さういふ研究を書いてくれる人があるなら、寫生に關したことも讀みたい。文學の上に寫生の唱へられたのは明治になつてからのことのやうであるが、それは洋畫の方法から刺戟された寫生論の組織立てられたまでであつて、寫生そのものは、私達の根深い傳統の一つと言つてもいゝほど、かなり古くからあつたことを讀みたい。應舉をめぐつて流れて來た四條派の畫風を擧げるまでもなく、繪畫以外の小説にも、戯曲にも、俳句にも、前世紀の初の藝術の多くが寫生の方法を取入れてゐることを讀みたい。

善かれ悪しかれ、私達は父をよく知らなければならぬ。その時代をよく知らなければならぬ。若し私の讀みたい

應舉 圓山氏。寫生畫に巧みにして、その流を圓山派といふ。寛政七年(一七九五)歿、年六十三。  
四條派 寫生畫派の一派。松村月溪に始まる。

と思ふやうな研究を書いてくれる人があるなら、何程の題目をそこに見出し得るか知れないやうな氣もする。それは當時の人の心を結晶したやうな文學や美術の作品の比較にのみ止まるまい。あの諧謔と諷刺とに満たされて居るやうな三馬、一九、その他の作者の戯作の中に、當時の平民の道德と虚無的な傾向とを探らうと試みたものは北村透谷であつた。あゝいふことも精しく讀んで見たい。意氣とか粹とかの美の觀念が、當時の民衆の間から生まれて來て居ることも注目しに値する。武士の階級が次第に墮落して俠客などの輩出するやうになつた時、何程當時の一般の人の心が、經濟的にも道德的にも、また精神的にも解放を求めて行つたか、それがまた滑稽文學ともなり戯作ともなつて、奈何に當時の文學の上にあらはれて來て居るか、さういふことも讀みたい。

北村透谷 文學者。名は門太郎。東京の人。明治二十七年歿、年二十七。

契沖眞淵宣長、その他先覺者の大きな功績は、古語の研究によつて、幾世紀に亙る支那の模倣的な風潮から自國の言葉を救つた所にあらう。一大反抗の精神の喚起した所にあらう。

契沖 國學者。攝津の人。大阪高津の圓珠庵住僧。元祿十四年(三三)歿、年六十二。

あの人達の遺した仕事の大きかつたことに氣づいたのも、やはり私はフランスの旅にあつて我が國を顧みた時であつた。前世紀の初には既に宣長も歿して居ることを思ふと、恐らく

眞淵 賀茂氏。國學者。歌人。遠江の人。宣長の師。明和六年(四九)歿、年七十三。

當時はその使徒達の時代であつたらう。その中で代表とも見るべき平田篤胤は、國學を神道にまで持つて行つたやうな人で、あの人の歩いた道は、宣長あたりよりずっと窮屈なものといふ氣がするが、當時の人の心に刺戟を與へたことは争はれまい。私は前世紀の初に起つて來た保守的な精神を、單に頑固なものとはばかり見ずにもつと別な方面から研究されたものを讀みたい。それが盛んな愛國運動となつて行つた

平田篤胤 秋田の人。本姓大和田。平田篤穩の養子となる。天保十四年(三三)歿、年六十八。

跡を讀みたい。この保守的な精神は吉田松陰等によつて代表されるやうな世界の探求の精神と全く腹ちがひのものであつたらうか。何と言つても前世紀での大きな出來事の一つは明治の維新であらうが、舊制度の打破、民族の獨立、外國勢力への對抗といふことにかけて、前世紀の初から流れて來たこの二つの精神が相交叉し、相刺戟した跡を讀みたい。今日、私達の眼前に展開しつゝあるやうな世界主義とその反動の大勢とは、早くも前世紀に産聲を揚げた雙生兒であることを讀みたい。

私は少年時代を振返つて見て、自分の物心づく頃から明治二十年頃までの間は、かなり暗かつた時代のやうに思ふ。

明治の初に生まれて來たものは、文學でも美術でも、徳川時代の末にすら比較し難いほど見劣りのする粗末なものばかりだ。

明治維新の齎したものは、その一面に於て、こんな深刻な影響のあることを想ひ見なければならぬ。封建時代の遺物といふ名の下に、あらゆる文化が蹂みにじられはしなかつたらうか。僅かに黙阿彌の脚本があつて前世紀を飾るのみで、詩も隠れ、繪畫も潛み、あらゆる藝術は一時姿を晦ましたかのやうに見える。さういふ破壊の動いて行つた跡が正しく判断されてあるものを讀みたい。實際、私達は斯ういふ時代から出發して來てゐる。一概に過去を黄金時代のやうに考へ、今日を頽廢墮落の極と見るやうなことは、私は取らない。今日の青年の激しい精神の動搖を思ふものは、もつとその由來する所を自分等の内部に尋ねて見なければなるまい。

(春を待ちつゝ)

黙阿彌 河竹黙阿彌。  
本名菊川金作。劇作家。明治三十四年歿、年六十。

一五 生命の冠(第二幕)

山本 有三

場所——樺太西海岸マウカ

時代——現代

三月の中頃、昨日來の雪が上つて、外は日光がきらりと輝いてゐる。

有村、表から悄然と這入つて來る。そして煖爐の傍に腰を下す。

欽次郎、製造場から出て來る。

欽次郎、あ、兄さん、いつ歸つて來たんです。

有村、今歸つて來たのだ。

欽次郎、どうでした、アラカイの方は。

有村、やはり法外のことをいつてゐて、逆も手が出せない。

欽次郎、人の足許をつけ込むなんて、どいつもこいつも厭な奴ば

かりだな。厭な奴といへば、さつき久富商會の片柳が來ましたよ。

有村、それからどうした。

欽次郎、人を思ひ切り壓迫しておき乍ら、しらばつくれたことを

いつて來ましたから、面と向つて、うんといつてやりました。

有村、さうか、火蓋を切つたか。

欽次郎、え、やつつけました、逆も黙つちやゐられませんから。

罐詰工、製造場から出て來る。

罐詰工、旦那、雌蟹や仔蟹はどうしませう。

有村、あれは使つちやならないといつてあるぢやないか。

罐詰工、ですけれども、あれを使はなくつちや、逆も間に合ひませ

ん。

有村、間に合はなくつても、あんな蟹は一切使つちやならない

山本有三 本名勇造。

文學者。明治大學

名譽教授。明治二

十年生。

マウカ 眞岡。樺太

南部西岸の港。鮭

漁の中心地。

有村 有村恒太郎。

有村罐詰製造所主。

欽次郎 恒太郎の弟。

アラカイ 眞岡に北

接する漁場。

久富商會 神戸の買

易商。

片柳 片柳玄治。久

富商會の樺太出張

所長。

といふのに。

罐詰工「ぢや、どうしませう。蒸釜は煮立つてゐるんですが。

欽次郎「まあいゝ。こちらから言つてやるから。

罐詰工「へえ。(製造場へ去る)

欽次郎「兄さん、あなたのやうに嚴重なことをいつてゐたら、とても品は間に合ひませんよ。

有村「併しこれから繁殖する雌蟹や、仔蟹を使ふことは出来な  
いぢやないか。

欽次郎「さういひますがね、兄さん。あれを濫獲しない限りいゝぢやありませんか。一度網に懸つて來た以上、假令船から直ぐに捨ててやつたつて、もう網にからまつた奴は足を痛められてゐますから、少なくとも半死か、大抵は死んで了ふのです。どうせ海に放してやつて死んで了ふものなら、雌

蟹だつて仔蟹だつて使つていゝぢやありませんか。

有村「それ許りぢやない。雌蟹や仔蟹はアルカリ性が強いから黒變する患がある。

欽次郎「なあに、それも製造法を少し氣をつけて、硫酸紙を丁寧に敷きさへすれば防げますよ。

有村「いや、第一品質が劣るからいけない。あんなものは一等品には使へないぢやないか。

欽次郎「その點も罐詰のことですから、何とか誤魔化しがきくぢやありませんか。

郵便配達夫「郵便！」と手紙を置いて行く。

欽次郎「それを受取つて讀む。」やあ、また値上げだ。

有村「どこから來たのだ。」

欽次郎「東洋製罐です。罐がまた三割値上げだといふのです。」

アルカリ性 金屬化合物にして、水溶液となりては赤色リトマス溶液を青色に變ずる作用をなす。

有村 弱つたな。

欽次郎 蟹は高い、罐は上る、かう何もかも高くつちや、とてもやり切れやしな。兄さん、もう非常手段を講ずるより外ありませんよ。

有村 非常手段とは、品を落して、どこまでもうちの持船で間に合はせようといふのか。

欽次郎 さうです。さうでなかつたら——昨夜も遅くまで二人で計算を立てて見たでせう。他から蟹を買つては、何萬つて損するんですからね。その上、罐が三割も値上げになつたとすりや、とてもやつて行けやうがないぢやありませんか。

有村 併し一等品といふ契約に等外品は送れないからね。欽次郎 そんなこといつたつて、今の場合爲方がないぢやないで

一等品といふ契約  
英國から有村が一等品といふ契約で二十四萬罐（五千函）の注文を受けたるをいふ。

すか。

醫師 匹田、女中に送られて奥から出て来る。

匹田 いや、もう構はんでくれ、構はんで。

兄弟は醫師の言葉を聞きつけて、話をびたりと止める。

有村 あ、先生がおいでになつてゐたのですか。少しも知りませんで。

匹田 いや、お構ひ下すつては困る。時に奥さんは今日は少し熱が低いやうだ。あの分なら心配のことはありません。有村 いろ／＼有難うございます。

欽次郎 今日先生、朝の御回診ですか。

匹田 いや、昨夜、そら汽船が沈没したらう。あの乗組員に病人が出来たものだから、今その歸り道さ。丁度お門を通つたからお寄りしました。



有村「あ、さうですか。それはどうも御親切に。」

欽次郎「汽船といへば氣の毒なことをしましたね。でも運送船とかで、お客が乗つてゐなかつたのはせめてもの幸でした。」

有村「乗組員はみんな助つたんですか。」

匹田「みんな助つた。唯船長が可哀さうな事をしましたよ。」

有村「どうしたのです。」

匹田「船と一緒に沈んでしまつたのだ。」

欽次郎「あ、船長は亡くなつたのですか。私はみんな助つたと聞いてをりましたが。」

匹田「さうです。乗組の船員すらさう思つてゐたのです。所が後になつて船長のゐないことが分つたのだ。」

有村「どうしたのでせう。」

匹田「今わたしはその話を聽いて涙をこぼして了ひました。」

かうなのです。沈没した北海丸は、小樽から荷を積んで、浦鹽に行く船だつたのです。所が途中で嵐に遇つたものだから、それを避けようと思つて、このマウカにやつて來たのです。それでテーヤの沖まで來ると、あすこいらはあの通り暗礁の多い所だ。そこを吹雪は烈しい、船は小さいときてゐるから、船員は必死となつて働いたけれども、とうとう暗礁に乘上げて了つたのです。で、あつといふ間もなく、水はどしどし船に浸入して來たので、船長はもう仕方がないから、『全員甲板へ』『ボート降し方』を命じたのです。そして全員ボートに乘移つた所が、船長だけはまだ船に残つてゐるのです。

欽次郎「あ、それでとうとう船と運命を共にして了つたのですか。」

小樽 小樽港。北海道西岸の開港場。

匹田 いや、さうぢやない。話はこれからなのです。それで船長がまだ甲板に残つてゐるから、ボートに乗つた者は早く降りて来るやうに勧めたのです。すると船長は『おい、ちよつと待つてくれ、忘れ物をした。』といつて、飛ぶやうにデッキを下へ駆け下りて行つたのです。

欽次郎はう。

匹田 何しろ浪は逆巻く、夜は暗い。ボートに乗込んだ連中は気が氣ぢやなかつた。併し船長は間もなく甲板に歸つて來ました。そして『いゝか、下りるぞ。』と大聲でどなつて、闇の中をずる／＼と降りて來たのです。そこでボートは直ぐに本船を離れて、死にも狂ひに突進したのです。でやつと陸に着いて見ると、船長はゐないのです。有村 どうしたのです。

匹田 あとからボートに降りたのは船長ぢやなかつたのです。欽次郎 ぢや誰なのです。

匹田 料理の皿洗をやつてゐたボーイなのです。どうして此の男が一人乗後れたかといふと、此の男は二三日前に船の中で人の物を盗んだので、物置のやうな一室に監禁されてゐたのです。所が、今船が暗礁に乗上げて沈没するといふ時には、誰だつてわれ勝ちに逃げようとするから、一人として此のボーイのことなどを考へてゐたものはありやしない。船長自身さへも危く忘れる所だつたのだ。下から早くボートにお乗んなさいといはれた時に、ふと監禁したボーイのことを思ひ出したのです。そこで『忘れ物があるから鳥渡待つてくれ。』といつて、急いでボーイを救ひ出して來たのです。

有村「そして自分は船に残つて、船と共に沈んで了つたのですか。」

匹田「さうです。」

有村「實に立派な人格者ですね。」

匹田「船長なんでもものは船頭の親方みたいな者だが、偉い奴がゐたもんです。」

欽次郎「北海丸に限らず沈没なんて時はいつも船長は立派な行爲をやりますね。」

有村「私たちから見ると、人のやれないことをやつた様に思へますが、船長自身にとつては、あれが自分のやる當り前のことだつたのでせう。」

匹田「いや、その當り前のことがなか／＼やれないのだ。偉い人といふのは大きな爲事やつた人ではない。爲すべき

ことを敢然として爲した人だ。」

有村「さうもいへますね。」

匹田「時計を出して見て。」これは長話をしました。私は外へ廻らなくちやならない。」

欽次郎「お歸りでございますか。」

匹田「御病人をお大事に。」

有村「有難うございます。」

匹田「中央の戸口から表へ去る。」

欽次郎「兄のところに進み寄る。」兄さん、やつつけませう。」

有村「やつつけるとは。」

欽次郎「仔蟹を混入することです。」

電報配達夫が「電報。」と叫んで電報を置いて行く。有村、電報を開いて見る。顔に不安の色が動く。

御病人 恒太郎の妻 昌子。

欽次郎「どこから来たのです。」

有村「英國だ。(電報を弟に渡す。)

欽次郎「電報を見て」急ぐから期日を違へないやうにつてんですね。

有村「さうだ。」

欽次郎「兄さん。愈、やつつけるより外ないぢやありませんか。」

有村「無言、首を垂れてゐる。」

欽次郎「二十萬罐を八十日でやつて了ふには、どうしても日に三千宛製罐しなくちやなりませんからね。兄さんのやうにこれを使つちやいけないの、あれを入れちやいけないのといつてゐたら、逆もその半分も出来やしませんよ。」

有村「無言。」

欽次郎「少し品が落ちたつて期日さへ違へなかつたらい、ぢや

ありませんか。兄さん、もう考へてゐる時ぢやありませんよ。どん／＼運ばなくちや。

有村「敢然と立上り」「よし、やらう。」

欽次郎「さうですか。それでわたしも安心した。」

有村「おい欽次郎、店の者を直ぐにアラカイにやつてくれ。」

欽次郎「何ですつて。」

有村「もう爲方がない。いくら高くつてもアラカイの蟹を買ふより外はないぢやないか、約束した船の方はとても引取れる望がないんだから。」

欽次郎「兄さん、それは正氣の沙汰ですか。」

有村「何だつてそんなことをいふんだ。」

欽次郎「そんなことをしたら此の家はどうなるんです。少し位の損なら忍べますが、兄さんのいふやうなことをしたら此

の家は立つてはいきませんよ。

有村「わたしは契約に背いて悪い品を送ることは出来ないのだ。」

欽次郎「併し家を破産させても關はないんですか。」

有村「おい欽次郎、潔く討死しようぢやないか。今度のやうにかう四圍の事情が悪くつちや、どうにもしやうがない。併しこれつきりぢやない。まだ秋の漁期もある。翌年もある。翌々年もある。それ迄にはきつと恢復がつけられるから。」

欽次郎「さう旨くいくもんですか。殊に兄さんのやうな遣口ぢや。」

有村「わたしはお前によくいつてゐたぢやないか。本當の商業は戦鬪と同じやうに、場合によつては自ら進んで死をも

損失をも辭せないものでなくてはならないつて。さうだ。

昨夜沈没した北海丸がいゝ例だ。お前が若しあの船の船長だつたら、お前はあの際どういふ處置をとる。

欽次郎「無論あの船長と同じやうにやります。」

有村「此の有村の店は丁度今沈没しかけてゐる汽船ではないか。そして私とおまへとはその船長だ。」

欽次郎「沈没する時はわたしは無論あの船長に劣らないつもりです。併しそれは最後の瞬間のことです。今船はまだ沈没はしやしません。沈没しない前に死を急ぐのは、無智な自殺者が死場所を探してゐると同じです。」

有村「お前は暗礁に乗上げてゐても、まだ危険に氣がつかないのか。」

欽次郎「船を沈める事は船長の務ではありません。船を浮かび

揚らせる事が船を進行させる事が船長の第一の務です。  
有村水が甲板を浸しても、お前はまだそんなことをいつてるのか。お前は船長としての明察がない、船長としての資格がない。

欽次郎或はさうかもしれない。併し沈める事はいつでも出来ます。わたしは是非浮かび揚らせたいのです。船も助り、船員も助り、そして私も助りたいのです。

有村それは誰だつてさう思はないものはない。併し船が沈みかけてゐる時、そんな蟲のいゝことをいつてゐたら、自分許りか凡てのものを失はなければならぬ。それこそ救ふべからざることが出来る。

欽次郎いゝえ、確に助ります。たゞそれには兄さんの頭さへ變つてくれ、ばい、んです。

奥で赤ん坊の泣聲がする。

欽次郎あゝ、あの聲が聞えませんか。兄さん、あなたは子供を飢ゑさしても關はないんですか。

有村(無言、首を垂れる。)

欽次郎嫂さんは長いこと寝てゐる。その病人の寝てゐる家をなくして了つてもかまはぬと、あなたはいふんですか。  
有村いや、家内のことは……。

欽次郎まあお聞きなさい。嫂さん許りぢやありません。妹にしたつてさうです。妹は上の學校に行きたいのです。けれど、事情が事情だから、女學校だけで止めにして、家の手傳をしてゐるぢやありませんか。そして若い娘にも似合はず、襷掛けでせつせと働いてゐるのはなんの爲です。家を大事だと思つてゐるからぢやありませんか。またわたし

妹 恒太郎・欽次郎の妹御子。

だつてさうです。兄さんの前だが、わたしは家の雇人より先に起きて、夜も遅くまで働いてゐます。嫁をと言つてくれる人もありますが、もう少し、もう一辛抱、もうちつと家が楽になつてからと思ふものですから、未だに貰はないでゐるんです、誰にしたつて家を思はないものはありません。そして働いたお蔭には、漸く運が向きかけて來たんです。その今一息といふ所へ來て、兄さんのやうな事をいひ出されては、わたしは働き甲斐がなくなつて了ひます。

有村 そりやお前達には本當に濟まない。

欽次郎 誰だつて、あゝ金が溜つて行く、今月はいくら残つた、來月はいくら儲かると、さう思へばこそ働く氣にもなれるんです。損する爲なら、わたしは働く事はもう御免です。

有村 お前のいふ事にも無理はない。併し商人の務は儲けるばかりが能ではない。そこをよく了解してくれなくつちや困る。

欽次郎 それで家族はどうするんです。

有村 たとへ子供が飢ゑてゐるとしても、不正な金で、わたしは乳を吞ませたくない。契約を誤魔化した金で、家族のものを養ひたくない。正しいことをして貧乏をするなら、爲方がないぢやないか。これは家族のものも屹度我慢してくれるに違ひない。

欽次郎 (稍興奮して)「あなたは縁の遠い外國人の信用を落さない爲に、近い身内のものを滅すのですか。家の者には飯を食はせなくても、他人には見えを張らうといふのですか。

有村 (これも興奮して)「見えなぞぢやない。また遠いとか近いかの問題ではない。唯しなければならぬことをする

だけのことだ。

欽次郎「破産は、しなければならぬことではありません。しな  
いやうにするのが正當です。

有村（愈、激して）「極つたことだ。而もそれをせねばならぬ破  
目に陥つてゐるのではないか。さうするのが正しいことな  
ら、爲方がないぢやないか。

欽次郎（烈しく）「破産しなくつて濟むものを、わざ／＼破産する  
なんて、それが何で正しいのだ。肉親のものを痛めるのが  
何で正當だ。

有村「お前はまだそんなことをいつてゐるのか。

欽次郎「兄さんこそ考へて下さい。

有村「考へ直さなけりやならないのはお前の方だ。

欽次郎（侮蔑的に）「馬鹿正直にも程があらあ。

有村（聞きとがめて）「なに。

欽次郎「何が何です。

有村「貴様こそ何だ。

二人殺氣立つて掴み合ひを始めようとする。

罐詰工「製造場から出て来る。

罐詰工「どうしたもんでせう、旦那。釜が煮立つてゐるんですが。  
有村「よろしい。今大蟹を取寄せるから、そんなことは心配し  
ないでいゝ。

罐詰工「外から蟹が来るんですか。

有村「さうだ。おい、そちらに店の者がゐないか。直ぐにこゝ  
に来るやうにいつてくれ。

罐詰工「へえ、畏まりました。（去る。）

欽次郎「ぢや兄さん、どうしてもやるんですか。



有村外に手段がないぢやないか。

欽次郎兄さん、どうかももう一度考へ直して下さい。

有村もう考へ盡くした事だ。これ以上考へる餘地はない。

欽次郎捨てばちに、「こんなことになるんなら、賠償金を拂ふ方が餘つ程増しな位だ。」

有村商人の本務は契約を守ることだ。品物を支給することだ。たゞそれだけだ。損害金を出すことぢやない。

店の者入り来る。

店の者何か御用ですか。

有村うん、おい十吉お前すぐアラカイへ行つてないひ値通りでいゝから直ぐに蟹を届けてくれつて、さういふんだ。

雇人二「畏まりました。」

有村急いで行つて来い。

雇人二へえ。(直ぐに表へ駈出す。)

有村それから倉次郎と富三は二三日來製造した品の悪い罐詰を選び分ける。

二人へえ、あの別にしちまふんですか。

有村さうだ。よく氣をつけてな。

二人「畏まりました。(製造場に這入つて行く。)

有村それから定吉お前は犬橋の用意をして。

雇人四へえ。(直ぐに去る。)

表では雪の上を走る喜ばしさに、犬が跳り上るので、その度に櫓の鈴がちやりん／＼と鳴る。やがて雇人の定吉が這入つて来る。

雇人四「旦那、櫓の用意が出来ました。」

有村さうか。おい、欽次郎お前銀行へ行つて預金を引出して

来てくれないか。さうして……。

欽次郎「今日は御免を蒙りませう。わたしは今は働く氣がありませんから。」

有村「さうか。ぢやわたしが行つて来よう。(金庫から銀行の預金帳を出す。)

有村(欽次郎に)「ぢや行つて来るからな。ずつとアラカイから外の方へも廻るつもりだから、少し遅くなるかもしれない。おい欽次郎氣を直してくれなくちや困るよ、え。」

さういひながら有村は表へ出て、櫓に乗つて出掛けて行く。犬櫓の勇ましい鈴の響が暫くの間聞える。欽次郎は黙然として煖爐の傍に腰を掛けてゐる。(下略)

(生命の冠)

## 一六 人の人たる所以

穂積 重遠

『人ノ人タル所以ハ人ト人トノ結合ニ在リ。』

ドイツの大法律家ギールケはその名著『ドイツ團體法論』をこの言葉で書き始めた。私はこれを一法律書の巻頭を飾るだけの言葉としてはもつたない位の金言と思つて、私の一身を處するについての座右の銘ともし、また私の學問の根本方針ともしてゐるのである。

人間は自ら萬物の靈長と稱してゐるが、そも／＼何がえらいのであらうか。一匹々々のいはゆる下等動物と、一人々々の人間とを比べて見ると、必ずしもすべての點に於て人間の方がまさつてゐるとはいへない。しからば人間の價値はどこにあるのか。共同生活に存するのである。人類

穂積重遠 法學博士。  
男爵。東京帝國大學教授。明治十六年生。

ギールケ (1841-1827)

は初めから今日の姿であつたのではなく、何萬年前の人類の祖先と今日の下等動物の祖先とは餘程接近してゐたらしく、更にさかのぼつては同一祖先だつたかも知れない。その際たましく、後に人類となるべき一群が他の仲間より共同生活の點に於て一步を先んじたために、生存競争に優勝して、この種族が次第に發達繁榮し、その種族が發達繁榮するに連れて共同生活がますます擴大強化せられ、すなはちスタートに於ける一步の差が、積り重なつて千里の開きとなり、つひに人類をして萬物の靈長たらしめた。すなはち、ひとへに『人ト人トノ結合』のお蔭である。而して現在の人類が一人では到底不能な大事業を、『人ト人トノ結合』によつて成就しつゝあることは、眼前の事實であるが、果して然らば、將來の人類を更に進化せしめて完全の域に達せしめるには、『人ト人トノ結合』をますます

ます理想的ならしめねばならぬことになる。すなはち、『人ノ人タル所以ハ人ト人トノ結合ニ在リ。』といふギールケの言葉は、實に人類の過去を説き、現在を語り、將來を豫言した名言である。

しかしそれだけの事ならば、ギールケの新發見ではない。東洋では既に二千年の昔に荀子じゆんしが、

力ハ牛ニシカズ。走ルコトハ馬ニシカズ。シカシテ牛馬用ヲ爲スハ何ゾヤ。曰ク。人ハヨク羣シ。彼ハ羣スル能ハザレバナリ。

と言つてゐる。すなはち力競べをすれば人間は牛にかなはん、かけつこでは馬に負ける、しかるに牛馬が人間にこきつかはれてゐるのはどういふ譯か、ほかでもない、人は共同生活が出来、牛馬にはそれが不能だからだ、といふのであつて、ギール

荀子 名は況。趙の人。支那戰國時代の儒者。

カハ云々 (力不若牛。走不若馬。而牛馬爲用。何也。曰。人能羣。彼不能羣也。)

ケの言葉と同じ意味である。しかし荀子は單に『群』と言ひ、ギールケは特に『人ト人トノ結合』と言ふ。そこにやはり二千年の進歩がある。觀念の精と粗と、文字通り同日の談でない。ギールケの言葉の直打は實に、『人ト人トノ』と言つた所に存する。複數語を用ひて『人々ノ』と言はずに、單數語を二つ重ねて『人ト人トノ』と言つた所が、その一句の眼目である。共同生活を營む動物は必ずしも人類のみと限らぬ。例へば蟻や蜂なども秩序整然たる共同生活をしてゐるといふことだ。しからば彼等も、その點に於て人類と同等かといふと、どうもさうではないらしい。蟻や蜂の共同生活は、いはゆる本能のみでやつてゐるのだ。一匹々々の蟻や蜂が各自の人格『蟻格』『蜂格』を自覺し、また他の蟻や蜂の人格を承認して、すなはち人格の相互的尊重の下に共同生活を營んでゐるのであるのではな

い。すなはち『蟻たちの集り』『蜂どもの群がり』に過ぎぬのであつて、『蟻と蟻との結合』『蜂と蜂との結合』とは言ひ得ない。しかるに人類に至つてはさうでない。一方に於て『我れこゝにあり』といふ個人的自覺をもつと同時に、『我れ世と共にあり』といふ社會的自覺によつて、一人々々の個人が人格の相互的尊重の下に結合するのが、人類の共同生活である。各個が獨立なるが故に全體がよく結合し、全體がよく結合するが故に各個の特色がますます發揮される。各人は『獨立』であるが『孤立』ではない。『分別』されるが『分離』しない。粒選りなるが故に連珠が輝き、連珠なるが故に一粒々々が光る。それが人間の社會であつて、個人が社會を作り、社會が個人を作る。すなはち『人』と『家』と『國』と『世界』とは、共に榮へ並び進むべきであつて、それが、ギールケのいはゆる人ノ人タル所以であり、

しかしてまた孔子の教の根本義たる『修身齊家治國平天下』  
(身ヲ修メ家ヲ齊ヘ國ヲ治メ天下ヲ平カニス)の大理想である。

この大理想に到達すべくわれは先づ各人現在の地位  
に於て自己の本分を盡くさねばならぬ。東郷司令長官の日  
本海海戦の信號『皇國ノ興廢此ノ一戦ニアリ各員一層奮勵努  
力セヨ』にも『全員』とせず『各員』とある。司令長官も艦長も  
士官も水兵も火夫も各員一層奮勵努力したればこそかの大  
勝利が勝ち得られたのだ。『各員』なくしては『全員』はあり得  
ない。イギリスのネルソン提督のトラファルガー海戦の信  
號は『イギリスハ各人ガソノ義務ヲ盡クサンコトヲ期待ス』  
であつた。疾きこと風の如く武者振ひして大敵に馳せ向か  
ふ日本精神と、徐かなること林の如く自若として強敵を迎へ  
るイギリス魂と、それらに勇ましく頼もしいが、これ亦『各人』

孔子 名は丘、字は仲尼。魯の人。支那の聖人。西紀前  
五五〇年没。

東郷司令長官 元帥

侯爵東郷平八郎。昭和九年薨、年八十八。

日本海海戦 明治三十八年五月二十七八日。

ネルソン (1758-1805) 子爵。トラファルガー海戦にて戦死。

トラファルガー海戦 西紀一八〇五年トラファルガー岬沖に於てイギリス艦隊とフランス・スペイン聯合艦隊との間に行はれし海戦。

である。而して戦ひ將に勝たんとして敵弾に斃れたネルソンの最後の言葉は『神ニ謝ス我ハ我ガ義務ヲ盡クセリ』であつた。各人に對する最初の信號と、自身についての最終の一言と、前後照應して誠に理想的である。地位の高下、職務の大小は問題でない。凡そ最後の瞬間に『有難いことだ。我は我が義務を盡くした。』と笑つて目をつむれたら、誠に人生の本懐である。かくしてわれわれが一層奮勵努力して各自の義務を盡くすことによつて、われわれの團結はいよゝゝ堅く、われわれの團結がいよゝゝ堅きによつて、各人はよくその本分を完くし得る。要するに名將の大軍を統率するも、大思想家の人生を指導するも、根本精神に於ては一脈相通する。ギールケは、すなはち人生の水先案内として、『人ト人トノ結合ニヨツテ人ノ人タル所以ヲ全クセヨ』といふ信號を揚げたのである。

かくしてわれ／＼はギールケに不朽の大教訓を感謝せねばならぬが、たゞ一つ彼に咎むべきは、『人ト人トノ結合』による團體生活がゲルマン民族ドイツ國民のみの長所であるかのやうに説いたことである。これは必ずしも彼のみならず歐米人のやゝもすれば陥る誤謬である。願はくは彼等をして、日出づるところ大日本帝國あり、萬世一系の皇室を戴き奉つて、人と人との美しき結合を續くること二千六百年なることを知らしめたい。更に願はくはわれ／＼自身として、各人一層自重自愛我が家をして、また我が國をして、眞に『人ト人トノ結合』たらしめ、國內にあつては協同融和、國際間に處しては公明正大、日本あるが故に世界平安に人類向上するの實を擧げ、以て『人ノ人タル所以』を成就したいものである。

(日本の過古現在及び將來)

ゲルマン民族 アリヤン人の一支族にして、ドイツ人はその子孫の代表者。

## 一七 世界の四聖

高山樗牛

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰かこれを能くせん。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四人、世呼びて世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生まれき。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といへり。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。その身一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳妻子を捨てて、王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年。つひに人生の奥義を究めて、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘にして跋提河の邊に歿しぬ。

高山樗牛 名は林次郎。文學者。文學博士。明治三十五年歿、年三十二。

伽毘羅國 中印度にある舊都。今のウーデーに當る。

淨飯王 伽毘羅國の王。

麻耶夫人 摩訶摩耶。淨飯王の妃。四十五歳にして、悉達多を産む。

佛陀 如來號の一。智者の義。知らざる事なき意といふ。

正覺 邪を離れ、妄に背きし大悟。

北天竺 北方印度のこと。

跋提河 源をネバール

今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に本づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒らに思索の高遠を欣びて人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹て



(釋迦像畫) 吳道子筆

て相争ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その洪

大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をしてその歸依する所を知らしめたり。

ルに發し南流して、ガンヂヌス河に入る。

元々 人民の意。萬民。

歸命 佛の教に歸依して、自己の身命をも捧げて念ずること。

魯國 周の侯國。周公の子伯禽の封ぜられし處。今の山東省兗州府の地。

定公 魯の三十二世の君。

大司寇 訴訟裁判のことを掌る。

齊侯 齊の景公。

春秋 周の平王四十九年より敬王三十九年に至る二百四十二年間の稱。

隳夷 丘陵の漸次に平かになる如く、次第に衰ふること。

を習へり。壯年のころ魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり、學徳愈進めり。魯の定公の時に至り、擢んでられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、内外その風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十



(孔子) 吳道子筆

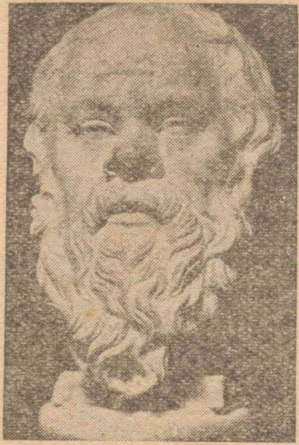
六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。當時の支那は所謂春秋の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の隳夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの

時の如きはあらざりき。孔子既に志を魯に得ず。乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に回さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。

此の如くにして四方に漂浪すること十三年。時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、わが道遂に窮す。世遂に我を知る者なきか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知る者なからん。」と。孔子對へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず。下學して而して上達す。我を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えん。」と。幾ばくもなくして歿せり。時に七十三。

ソクラテスは希臘の雅典に住める一彫刻師の子なりき。

嗚呼云々 史記、孔子世家に、「及西狩、見麟、曰、吾道窮矣。喟然歎曰、莫知我夫。子貢曰、何爲莫知夫子。子曰、不怨天、不尤人、下學而上達。知我者其天乎。(中略)君子病沒世、而名不稱、吾道不行矣、吾何見於後世哉。」  
雅典 アテネ。古代希臘アツチカ州の首都。今希臘共和國の首府。



ステラクソ

その生まれたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つること八九十年なり。東西の聖人、あまりに時を隔てずして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止り、道德は空文の上へのみ尙ばれたり。その状、なほ釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關しては、殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法をもつて、辯難攻撃して、一步も假借せず、侃諤の正義、その稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。

詭辯學派 ソフイズム。西曆前第五世紀の後半において、一時希臘に勢力ありし學派。その始祖をプロタゴラスといふ。



然るに、喬木は風に折らるゝ、喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざる者相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に堂々として、壯快を極めたるものなりき。慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ。」と。その獄中にあるや、常にその門弟子を集めて、生死・靈魂・未來のことを説き、人の脱獄を勸むるに對しては、輒ち答へて曰く、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死はた何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや。」と。終に從容とし

て毒を仰いで歿せり。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一鶏を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは此の如くにして逝きぬ。年七十。基督は本名を耶蘇といふ。基督は「膏灌がれたる者。」といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生まれき。その生後四年を以て、西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母はマリヤといへり。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。



基督

アスクレピアス  
醫術の神。

ベトレヘム イエルサレムの南方の小村。  
ヨセフ ユダヤ族ナタンの子。  
マリヤ ヨセフの妻。ベトレヘムの旅舎に耶蘇を産む。  
ヨハネ 西紀前三四年ピラト王の治世の頃の人。洗禮者と呼ばる。故ありて下獄し、死す。  
洗禮 罪惡より洗ひ淨めて改宗する聖式。

抑、當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。茲に於て、一世の人心は缺焉として偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せん事を渴望せり。基督この間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子なり。」と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等、これを喜ばず、以て猥りに新法異説を唱へて、民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔刑に處せり。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ彼等を許せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり。」と。その刑場に

缺焉 ものたらぬ貌。

神よ云々 路加傳第二十三章三十四節に見えし言葉。

赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、我がために哭くこと勿れ。唯己と己の子とのために哭け。」と。此の如くして、基督は三十三年の短き生涯にて、十字架上の露と消え去りぬ。基督の死後その弟子等は、激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘めぬ。基督教即ちこれなり。

エルサレム云々 同二十七節以下に見えし言葉。エルサレムは猶太の主都。

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の内、釋迦を除いては、いづれも轆軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘なりといふべし。然れども、これらの人々の志す所は、天下後世にありて現世の禍福と一身の安堵とは、毫もその顧慮する所

にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却りて「わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えん。」と嗟歎せり。釋迦は衆生のためにその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く「正義を信ずる者に取りて、死はた何爲るものぞ。我をして、一日の生あらしめんか、乃ちその一日も國民の迷を覺まさざるべからず。」と。基督は己を罪に陥れたる者のために神に祈りたり。嗚呼何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

四聖はその生まれたる處と時とを異にす。故にその教理にも、また多少の差異なきを得ず。今その要を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。

それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は我の一念に執著するにあり。故に吾人は我の一念を脱却して無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして涅槃即ちこれなりと。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生まれながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて、身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを

わが道行はれず云々  
第一四八頁註參照。

煩惱 無明貪慾の惑  
ひ。  
涅槃 梵語。無爲寂  
滅などと譯す。圓  
滿究極の眞相。

我の一念 我執の妄  
念。

身を修め云々 大學  
に「古之欲明明  
德於天下者、先治  
其國。欲治其國  
者、先齊其家。欲  
齊其家者、先修  
其身。欲修其身  
者、先正其心。欲  
正其心者、先  
誠其意。」  
孝は百行の本云々  
古文孝經の序に出  
づ。

得べし。故に孔子の教は一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。おもへらく、真正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとは、もと一體のみ知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義自らその中にあり。正義は靈魂の満足なり。靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中にありと。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰

山上の垂訓 馬太傳  
第五章より七章に  
互つて出でたり。  
その山は猶太のガ  
ラリヤ州に在り、  
今テルハツチンと  
呼ぶ。

く、心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義をその前に行ふなかれ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。偽善者の行に倣ふなかれ。隠れたるを鑑み給ふ神は、あらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふることを能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞおのが目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば

與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪ぼろびに至る門はその路大きく、これに入る者は多し。嗟呼、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るものの少なきぞ。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるは、砂上に屋を建つる愚人の如し。と。基督教の精髓は、後世の人様々の色彩を加ふれども、實にこの山上の垂訓に基す。

此の如きは、四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今尙凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なる、それ何を以てかこれに比せん。

(樗牛全集)

### 一八 國民文化

我が國の文化は、肇國以來の大精神の顯現である。これを豊富にし發展せしめるために、外來文化を攝取醇化して來た支那の明時代に著された五雜組に、經書のうち孟子を携へて日本へ往く者があれば、その船は必ず覆溺するといふ傳説を掲げてある如きは、凡そ革命思想が我が國體と根本的に相容れないことを物語るものであり、我が不動の精神とこれに基づく嚴正な批判との存することを意味してゐる。菅原道眞の語といはれる「和魂漢才」なる言葉が一般に行はれたのも、かやうな意味に於てである。凡そまことの文化は國家民族を離れた個人の抽象的理念の所産であるべきではない。我が國に於ける一切の文化は

明 支那の國號の一。凡我が後村上天皇の正平二十三年(一二九二)より後西天皇(一二九三)の寛文元年(一六六一)頃まで。  
五雜組 十六卷。明の謝肇淛の撰。經書 儒教の經典。詩經・論語等十三經をいふ。  
孟子 十四卷。孟軻が孔子の道を紹述せし書。  
菅原道眞 是善の子。醍醐天皇の昌泰二年(九五)右大臣となり、同四年太宰權帥に遷され延喜三年(一〇三三)薨年五十九。  
和魂漢才 日本固有の國民精神と支那より傳來の學問との二つを兼れそなへること。

國體の具現である。文化を抽象的理念の展開として考へる時、それは常に具體的な歴史から遊離し、國境を超越する抽象的、普遍的のものとならざるを得ない。然るに我が國の文化には常に肇國の精神が儼存してをり、それが國史と一體をなしてゐる。

かくて我が國の文化は、一貫せる精神をもつと共に、歴史の各時代に於て各異なる特色を現してゐる。而して創造は常に回顧と一となり、復古は常に維新の原動力となる。即ち今と古とは一となり、そこに新時代の創造が營まれる。我が國の歴史を辿るものは、到るところにこの事實の明瞭に現れてゐるのを見るであらう。従つて我が國に於ては、復古なき創造は眞の意味に於ける創造ではない。それと同時に創造なき復古は眞の復古ではない。たゞ肇國以來一貫せる精神に

基づく「むすび」こそ、我が國のまことの發展の姿でなければならぬ。

元來我が國の學問は、歴代の天皇の御奨励によつて發達し、今日あるを得たのである。即ち夙に儒教、佛教並びにこれに隨伴した大陸の文化を攝取し、これを保護奨励し給うたのである。遣隋使、遣唐使にそへて多數の留學生、學問僧を遣されて、廣く外國文化の粹を採り給うたことや、萬葉集の撰集に次いで、古今和歌集以下所謂二十一代集等の勅撰、或は勅版の印行等、學問を御奨励遊ばされたことは、枚擧に違がない。これは近く明治維新以來、西洋の學問、技術の攝取普及に關する明治天皇の御軫念にも拜することが出来る。かく學問を保護奨励し給ふことは、一に皇祖肇國の御精神を恢弘し、國運の隆昌、民福の増進に大御心を注がせ給ふがために外ならぬ。

萬葉集 二十卷。仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌を集めたる我が國最古の歌集。撰者未詳。

古今和歌集 二十卷。醍醐天皇の延喜五年。紀貫之・紀友則・凡河内躬恆・壬生忠岑等勅を奉じて撰す。

二十一代集 勅撰和歌集の八代集と十三代集との總稱。

明治天皇 第百二十二代の天皇。御名は睦仁。明治四十五年崩御。御壽六十一。

古來我が國の學問には、自ら肇國以來一貫せる精神が流れてゐる。聖徳太子は、皇道の羽翼として儒佛老の教を攝取せられて、憲法十七條を肇作し、又三經の義疏を著し給うた。理即ち道理といふことを説かれるにしても、それは決して抽象的普遍的な理法といふが如きものとしてではなく、具體的に一貫せる傳統精神の上に踐み行ふべき道として示し給うてゐる。而してこの道によつて、當時の多岐多方面に互る學問・文化は綜合統一せられ、爾來常に復古と創造・傳統と發展とが相即不離に展開し、進歩を遂げて來た。

國史については聖徳太子は夙に天皇記國記等を作り給ひ、次いで天武天皇の聖旨に基づき、元明天皇は古事記三卷を撰録せしめ給ひ、元正天皇は勅して日本書紀三十卷を編纂せしめ給うた。而して日本書紀が撰進せられた翌年から、宮中に

於てこれが講筵を設けさせられ、臣民をして我が國のまこと姿を明かに覺らしめ給ふところがあつた。勅命による修史の事業は、醍醐天皇の御代に至るまで相續き、所謂六國史の成立を見るに至つたが、後世民間にも、大日本史の如き修史事業が企てられたのである。また、江戸時代に勃興した國學は、古典の研究に發した復古の學であり、國史とともによく國體を明かにし、國民精神の宣揚に大いに貢獻するところがあつた。

我が國のあらゆる學問は、その究極を國體に見出すと共に、皇運の扶翼を以てその任務とする。江戸時代に西洋の醫學・砲術その他が傳來した時、非常な困難を排してその研究に當つたのも、又、明治維新後、西洋の學術百般の採用に専念し、努力したのも、皆これ皇運を扶翼し奉る臣民の道に立つてのこと

聖徳太子 用明天皇の御代に於て、儒佛老の教を攝取せられたる。憲法十七條を肇作し、三經の義疏を著し給うた。理即ち道理といふことを説かれるにしても、それは決して決して抽象的普遍的な理法といふが如きものとしてではなく、具體的に一貫せる傳統精神の上に踐み行ふべき道として示し給うてゐる。而してこの道によつて、當時の多岐多方面に互る學問・文化は綜合統一せられ、爾來常に復古と創造・傳統と發展とが相即不離に展開し、進歩を遂げて來た。

元正天皇の御代に於て、日本書紀三十卷を編纂せしめ給うた。而して日本書紀が撰進せられた翌年から、宮中に於てこれが講筵を設けさせられ、臣民をして我が國のまこと姿を明かに覺らしめ給ふところがあつた。勅命による修史の事業は、醍醐天皇の御代に至るまで相續き、所謂六國史の成立を見るに至つたが、後世民間にも、大日本史の如き修史事業が企てられたのである。また、江戸時代に勃興した國學は、古典の研究に發した復古の學であり、國史とともによく國體を明かにし、國民精神の宣揚に大いに貢獻するところがあつた。

であつた。併しながら非常の勢を以て外來文化を輸入し、諸方面に向つて大いに發展しつゝある今日の學問に於ては、知らず識らずの間にこの中心を見失ふ懼れなしとしない。明治天皇は五箇條の御誓文の中に、

智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

と仰せられてゐるのであつて、如何なる學問に従事するものも、常に思をこの根本の目的に致し、よく我が國學問の本旨を逸脱せず、以て聖旨に副ひ奉ることに努めねばならぬ。

我が國の教育も、亦一に國體に基づき、國體の顯現を中心とし、肇國以來の道にその淵源を有すべきことは、學問の場合と全く同様である。我が教育は、古く氏上が氏人を率ゐて朝廷に奉仕した時代に於ては、その氏々に於ける祖先以來の奉仕の歴史の傳承が教育の内容をなした。例へば高橋氏文（とくま）に於

五箇條の御誓文 明治元年三月十四日 天皇紫宸殿に出御され、文武百官を率ゐ、天神地祇を祀り、御誓ひになりし國是。

高橋氏文 朝廷の内膳職高橋氏の由緒、事蹟を記せるもの。

て、高橋氏の祖盤鹿（たか）鷹命が景行天皇に奉仕して忠勤を擢んでてより、代々家職を襲ぎ、朝廷の内膳職に奉仕する由來を述べて、その子孫を教訓し、以て奉公の念を厚うせしめた如き、古來諸家の氏文は皆この類である。後世武士の教育についても、この傳統による家庭教育を重んじ、家門の名を守るべきことを常に訓へたのである。吉野朝の忠臣菊池氏の家訓たる菊池武茂（たけしげ）起請文に、

武茂弓箭の家に生まれて、朝家に仕ふる身たる間、天道に應じて正直の理を以て、家の名をあげ、朝恩に浴して身を立せんことは、三寶の御ゆるされをかうぶるべく候。その外私の名聞己欲のために義をわすれ恥をかへりみず、當世にへつらへる武士の心をながく離るべく候。とあるはその例である。

盤鹿六鷹命 孝元天皇の後裔。景行天皇 第十二代天皇。御在位七三（克）。同年崩御、御壽百四十三。吉野朝 南北朝時代の南朝。後醍醐天皇神器を奉じて吉野に入り給ひてより五十七年間。菊池氏 藤原氏の子孫にして、代々勤王家を出す。菊池武茂 勤王家。武時の第三子。木野を名乗る。



近世に於ける國民教育は、神道家・國學者・儒者・佛敎家・心學者等の活動によるものが多かつた。神道家に於ける中臣祓なかとみの尊重、國學者に於ける我が古典の研究とその普及との如きは、最も顯著なものである。かうした人々の貢獻に關聯して、神社に於ては和歌・俳諧の神前披講・獻額等が行はれ、奉納額は算道に關するものにも及んでゐる。諸藝諸道の祖として夫々の守護神を立て、八幡宮を武神として尊崇し、天滿天神を文神として仰ぎ、素戔嗚尊の八雲の神詠に和歌の起原を求めると、種々の道の起原を神に求めてゐる。

抑「をしへ」は「愛し」の語が示すやうに慈しみ育てる意味であり、人間自然の慈愛を基として道に従つて人を育てることである。「みちびく」は子弟をして道に至らしめる意味である。我が國の教育は、明治天皇が「教育ニ關スル勅語」に訓へ給うた

如く、一に我が國體に則とり、肇國の御精神を奉體して、皇運を扶翼するをその精神とする。従つて個人主義教育學の唱へる自我の實現、人格の完成といふが如き、單なる個人の發展完成のみを目的とするものとは、全くその本質を異にする。即ち國家を離れた單なる個人的心意性能の開發ではなく、我が國の道を體現するところの國民の育成である。個人の創造性の涵養、個性の開發等を事とする教育は、動もすれば個人に偏し個人の慾意に流れ、延いては自由放任の教育に陥り、我が國教育の本質に適はざるものとなり易い。

教育は知識と實行とを一にするものでなければならぬ。知識のみの偏重に陥り、國民としての實踐に缺くる教育は、我が國教育の本旨に悖る。即ち知行合一してよく肇國の道を行ずるところに、我が國教育の本旨の存することを知るべき

中臣祓 大祓詞のこと。朝廷の大切な神事を奏するもの。

和歌 長歌・短歌・旋頭歌・片歌の總稱なれど、狹義には三十一文字の短歌をいふ。

俳諧 連歌より獨立せるものにして、初は滑稽洒脫を旨とす。

八幡宮 應神天皇を主座とし弓矢の神を祀る。

天滿天神 菅原道真を祀る。

素戔嗚尊 伊弉諾尊・伊弉册尊の御弟。

天照大神の御弟。

八雲の神詠 八雲起つ、出雲八重垣、夫妻隠みに、八重垣造る、其の八重垣な。(古事記)

知行合一 王陽明の説。知はこれ行の始め、行はこれ知の成るなりとす。

である。諸の知識の體系は實踐によつて初めて具體的のものとなり、その處を得るのであつて、理論的知識の根柢には、常に國體に連なる深い信念とこれによる實踐とがなければならぬ。而して國民的の信念及び實踐は理論的知識によつて益正確にせられ、發展せしめられるのであるから、我が國教育に於ても、理論的・科學的知識は彌尊重獎勵せられねばならぬが、同時にそれを國民的の信念及び實踐と離れしめずして、以て我が國文化の眞の發達に資するところがなければならぬ。即ち一面諸科學の分化發展を圖ると共に、他面その綜合に留意し、實行に高め、以てかゝる知識をして各、その處を得しめ、その本領を發揮せしむべきである。

畏くも明治天皇は、明治十二年、教學大旨に、

教學ノ要仁義忠孝ヲ明カニシテ知識才藝ヲ究メ以テ人

道ヲ盡スハ我祖訓國典ノ大旨上下一般ノ教トスル所ナ  
リ

然ルニ輓近專ラ智識才藝ノミヲ尙トヒ文明開化ノ末ニ馳セ品行ヲ破リ風俗ヲ傷フ者少カラス然ル所以ノ者ハ維新ノ始首トシテ陋習ヲ破リ知識ヲ世界ニ廣ムルノ卓見ヲ以テ一時西洋ノ所長ヲ取り日新ノ效ヲ奏スト雖モ其流弊仁義忠孝ヲ後ニシ徒ニ洋風是競フニ於テハ將來ノ恐ルル所終ニ君臣父子ノ大義ヲ知ラサルニ至ランモ測ルヘカラス是我邦教學ノ本意ニ非サル也

と仰せられてゐる。寔に今の時世に照して深く思を致さなければならぬところである。

我が國の道は、古來の諸藝にも顯著に現れてゐる。詩歌・管絃・書畫・聞香・茶の湯・生華・建築・彫刻・工藝・演劇等皆その究極に於

ては道に入り、又道より出でてゐる。道の現れは、一面に於て傳統尊重の精神となり、他面に於て創造發展の行となる。從つて中世以來我が國の藝道は、先づ型に入つて修練し、至つて後に型を出るといふ修養方法を重んじた。それは個人の慾意を排し、先づ傳統に生き型に従ふことによつて、自ら道を得而して後これを個性に従つて實現すべきことを教へたものである。これ我が國藝道修業の特色である。

我が藝道に見出される一の根本的の特色は、沒我歸一の精神に基づく様式を採ることであり、更に深く自然と合致しようとする態度のあることである。庭園の造り方を見ても、背景をなす自然との融合をはかり、布置配列せられた一木一石の上にも大自然を眺めようとし、竹の簀の子に萱の屋根の亭を設けて自然の懷に没入しようとする。即ち主觀的計畫に

流れ人意を恣にするが如きものではない。茶道に於て佗びを尊ぶのも、それを通じて我を忘れて道に合致しようとする要求に出づる。狭い茶室に膝つき合はせて一期一會を樂しみ、主客一味の喜にひたり、かくして上下の者が相寄つて私なく差別なき和の境地に到るのである。この心は、古來種々の階級や職業のものが差別の裡に平等の和を致し、大なる忘我奉公の精神を養つて來たことによく相應する。繪畫に於ても、大和繪の如きは素直な心を以て人物・自然を寫し、流麗にして趣致に富み、日本人の心を最もよく表現してゐる。連歌俳諧の如きは、本來一人の創作ではなく集團的な和の文學、協力の文學である。又簡素清淨なる神社建築は、よく自然と調和して限りなく神々しいものとなつてゐる。寺院建築の如きも、よく山川草木の自然に融合して優美なる姿を示し、鑑兜や

大和繪 平安朝時代に起り、貴族生活を題材とせる繪。  
連歌 和歌の一體。短連歌と長連歌の二形式あるも、何れも二人の唱和を原則とす。

衣服の模様に至るまで自然との合致が見られるといふが如く、廣く美術工藝等にもよくこの特色が現れてゐる。更に我が國藝術について注意すべきは精神と現實との綜合調和及び夫々の部門の藝術が互に結びついてゐることである。即ち世阿彌の「花」芭蕉の「さび」、近松門左衛門の虛實論等に於ては、この心と物との深い一體の關係を捉へてゐる。繪卷物に於ては、文學・繪畫・工藝等の巧なる綜合が見られ、能樂に於ては、詞章・謠歌・謠、奏樂・舞踊・演伎・形、繪畫・工藝等の力強い綜合的實現がある。歌舞伎に於ても音楽と舞踊と所作との融合にその特色が現れてをり、又花道によつて舞臺と觀衆との融合にまで進んでゐる。

これを要するに、我が國の文化は、その本質に於て肇國以來の大精神を具現せるものであつて、學問・教育・藝道等すべてそ

世阿彌 觀世二世結  
崎元清。能樂師。  
康正元年(二三五)  
歿、年八十一。(異  
説あり)  
芭蕉 松尾芭蕉。俳  
諧正風の祖。元祿  
七年(三三五)歿、年  
五十一。  
近松門左衛門 新淨  
瑠璃の創始者。享  
保九年(三三〇)歿、  
年七十二。

の基づくところを一にしてゐる。將來の我が國文化も當にかゝる道の上に立つて益創造せらるべきである。

(文部省國體の本義)

— [終] —



昭和十二年七月二十三日 初版印刷  
 昭和十二年七月二十三日 初版印刷  
 昭和十三年一月二十二日 訂正再版印刷  
 昭和十三年一月二十二日 訂正再版印刷  
 昭和十六年八月十五日 訂正再版印刷  
 昭和十六年八月十五日 訂正再版印刷

女子國文新編(四年制)全八册奥附
定價
各金五十八錢

(略名) 文學垣內女國



著者 垣 內 松 三

發行者 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地 中等學校教科書株式會社

代表者 山本 慶 治

印刷者 東京市本郷區眞砂町三十六番地 龜 谷 良 一 (東東二一六)

發行所

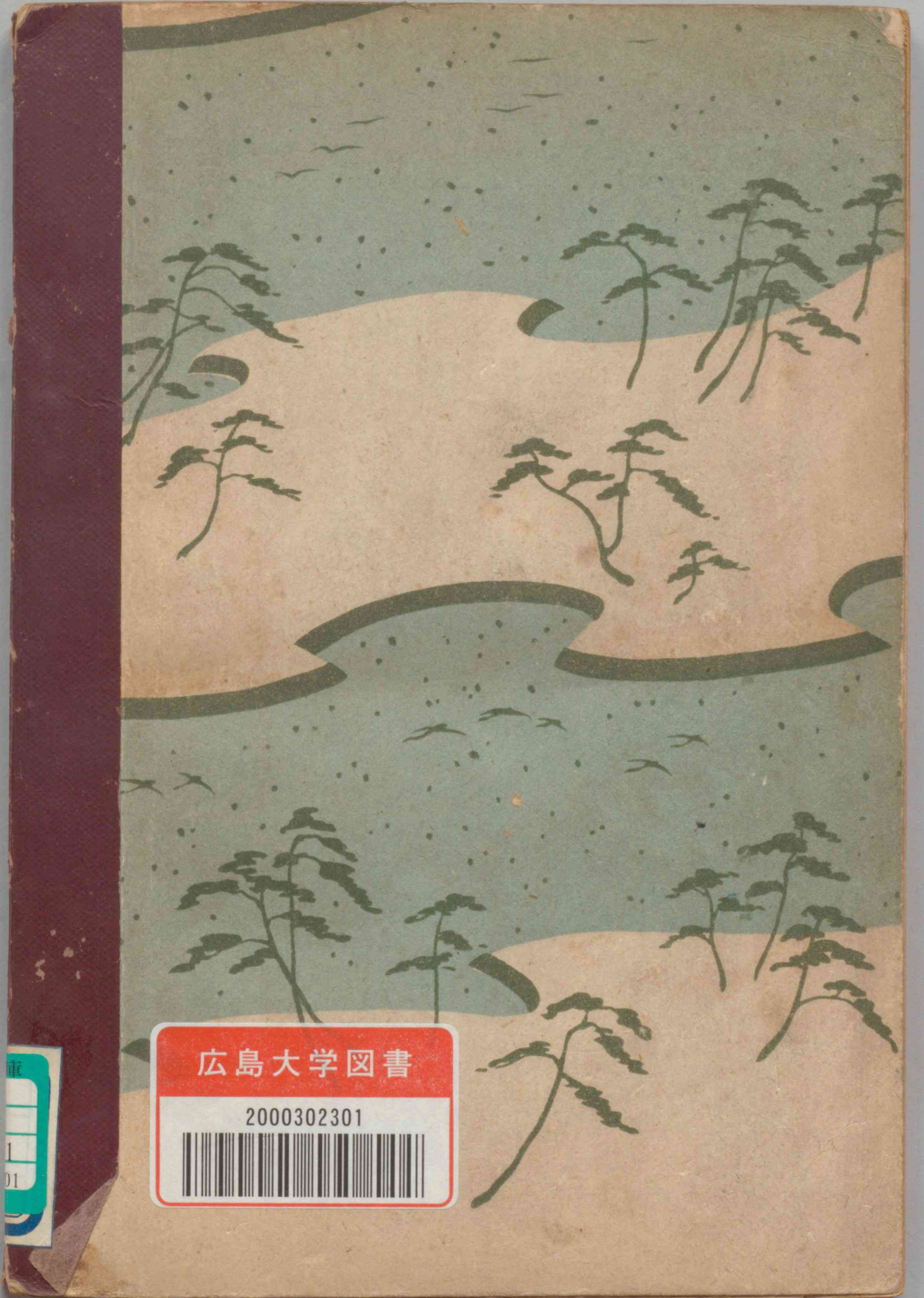
東京市麴町區飯田町二丁目二十番地

中等學校教科書株式會社

日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九



広島大学図書

2000302301



蔵  
1  
01





$\sqrt{2}$  S.13